

お宝公開

信州大学の

信州大学総合博物館創設準備企画展



Academia M.L.A. Ring
信州大学総合博物館

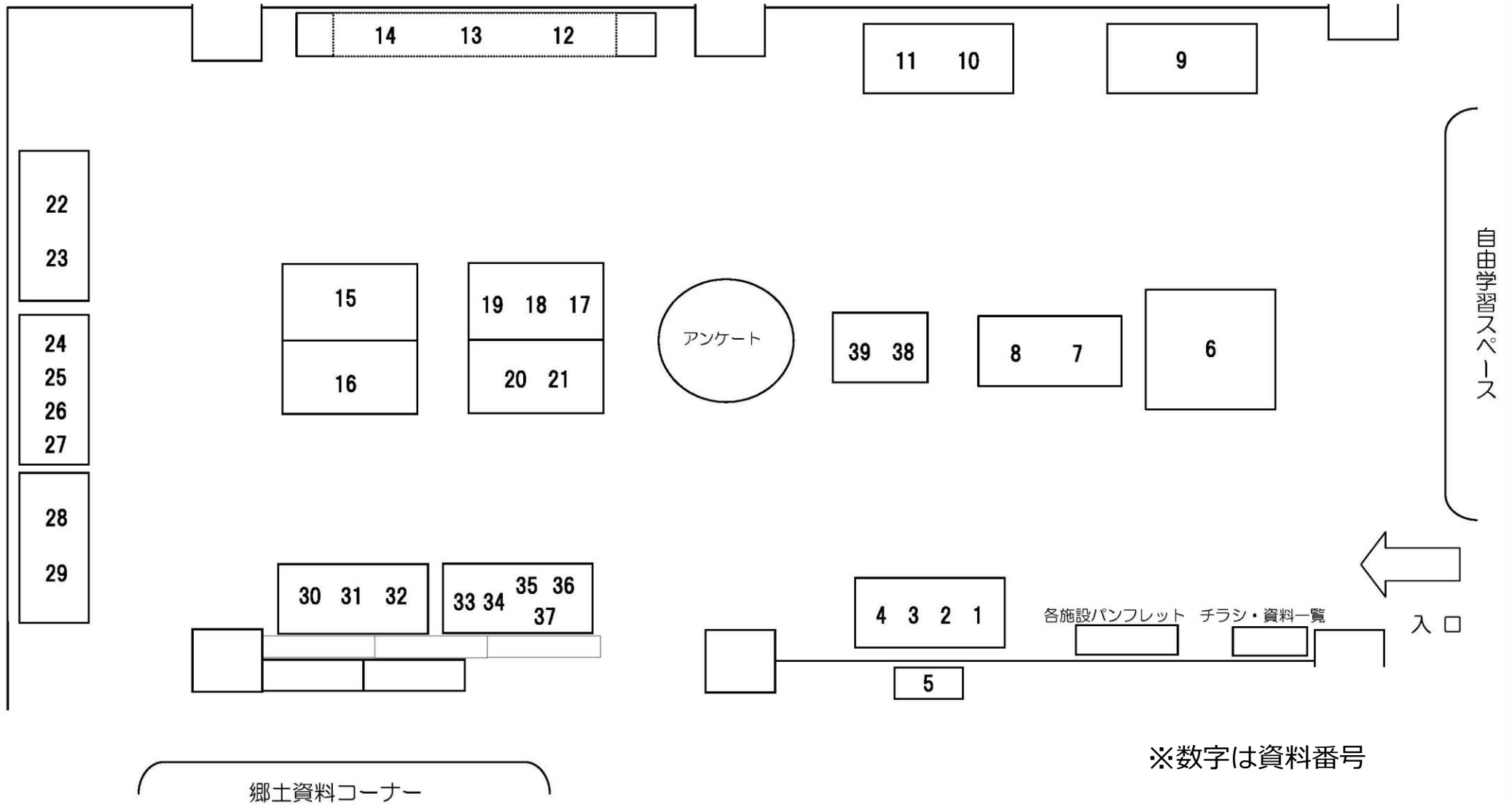
信州の歴史・風土を土台に信州大学の博物館・図書館・史料館の英知を集めた総合博物館情報サイト
英知の輪





展示会場：信州大学附属図書館 中央図書館1階展示コーナー

展示コーナー案内図



No.	資料名	年代	所蔵
1	Ecosystem analysis of the subalpine coniferous forest of the Shigayama IBP area, central Japan	1977（昭和52）年	附属図書館（中央図書館）
2	Summary report on the contribution of the Japanese National Committee for IBP, 1964-1974	1978（昭和53）年	附属図書館（中央図書館）
3	野帳「SKETCH BOOK」	1965（昭和40）年 1966（昭和41）年	教育学部附属志賀自然教育研究施設
4	志賀高原生物研究所『研究業績』第4号 志賀自然教育研究施設『研究業績』第5号	1965（昭和40）年 1966（昭和41）年	教育学部附属志賀自然教育研究施設
5	登録博物館・指定施設証書	2023（令和5）年5月	教育学部附属志賀自然教育研究施設
6	シンシュウゾウ（ミエゾウ）頭蓋骨化石（復元レプリカ）	500万年前	自然科学館
7	合成染料標本	製造年・製造元不明	自然科学館
8	元素標本	製造年不明 ドイツメルク社製	自然科学館
9	ライチョウ標本（剥製）（冬羽・オス、夏羽・メス、ヒナ、若鳥）	明治～大正時代 高山製作所標本部 / 高山動物標本製作所	自然科学館
10	宮島コレクション（腊葉標本）①ハナノキ、②ヤナギモ	①1995（平成7）年、1996（平成8）年、②2001（平成13）年	農学部食と緑の科学資料館「ゆりの木」
11	北原コレクション（腊葉標本）①タヌキマメ、②カニクサ	①1929（昭和4）年、②1929（昭和4）年	農学部食と緑の科学資料館「ゆりの木」
12	松高絵画≪晩秋、野尻湖畔≫ / 満谷国四郎	1923（大正12）年	附属図書館（中央図書館）
13	松高絵画≪雪の諏訪湖の景≫ / 柚木久太	1920（大正9）年	附属図書館（中央図書館）
14	松高分類表と分類別蔵書目録	製作年不明	附属図書館（中央図書館）
15	安西流馬医巻物 / 安西播磨守	1710（永宝7）年	附属図書館（農学部図書館）
16	官舎之記 / 竹内松次郎	1947（昭和22）年1月5日	附属図書館（医学部図書館）
17	『浅流：歌集』 / 斎藤茂吉著・八雲書店	1946（昭和21）年	附属図書館（中央図書館）
18	『碓氷を越えて：第一回関東旅行の菜』 / 長野縣師範学校内第一回関東旅行委員編集・発行	1930（昭和5）年3月	附属図書館（教育学部図書館）
19	『校友會誌 第3號』 / 長野工専文藝班編輯	1947（昭和22）年12月15日	附属図書館（繊維学部図書館）
20	『信州大学医学部二十五年史』 / 信州大学医学部25周年記念会	1969（昭和44）年5月10日	附属図書館（医学部図書館）
21	上田蚕糸専門学校創立二十五周年祝賀記念帖	製作年不明	附属図書館（繊維学部図書館）
22	蚕の繭の標本（1）	製作年不明	繊維学部資料館、真綿・蚕糸館
23	蚕の繭の標本（2）「桑の品種ト掃立時期」	製作年不明	繊維学部資料館、真綿・蚕糸館
24	尖頭器（塩尻市内出土）	旧石器時代（約20,000～15,000年前）	医学部
25	歯牙垂飾（佐久市月明沢岩陰遺跡出土）	弥生時代前期末から中期初頭（約2,350年前）	医学部
26	土偶（頭部）（波多村（現松本市波田）出土）	縄文時代中期（約5,000年前）	附属図書館（中央図書館）
27	土偶（胴下半部）（波多村（現松本市波田）出土）	縄文時代後期（約4,000年前）	附属図書館（中央図書館）
28	忠誠寮鬼瓦	1920（大正9）年9月開寮 ～1983（昭和58）年解体	人文学部
29	文部省学校教育局長 開学認可通知「新制国立大学設置について」（複製）	1949（昭和24）年5月31日	大学史資料センター
30	忠誠寮日誌	1949（昭和24）年、1950（昭和25）年	人文学部
31	諸収入金回議簿	1948（昭和23）年10月 1949（昭和24）年4月 1950（昭和25）年度	工学部
32	出張命令簿	1948（昭和23）年度	工学部
33	学生帽 松本高等学校開校50周年記念	1968（昭和43）年	大学史資料センター 松本高等学校卒業生資料
34	学生帽（角帽）	1948（昭和23）年頃	大学史資料センター 松本医科大卒業生資料
35	ベルトバックル 卒業記念品	1945（昭和20）年	大学史資料センター 長野工業専門学校卒業生資料
36	襟章	1946（昭和21）年	大学史資料センター 官立長野師範学校女子部卒業生資料
37	手ぬぐい 信州大学教育学部 創立九十周年記念	1967（昭和42）年	大学史資料センター 教育学部卒業生資料
38	文理学部の机	製作年不明	大学史資料センター
39	試験問題（複写）：水力機械問題（昭和35年度後期） 流体力学試験 後期 代数学（A）前期・後期試験問題	1961（昭和36）年3月7日（火） 1962（昭和37）年2月23日（金） 1957（昭和32）年9月25日・1958（昭和33）年2月27日	大学史資料センター：工学部卒業生資料 工学部卒業生資料 教育学部卒業生資料

展示構成

はじめに

教育学部附属
志賀自然教育研究施設

自然科学館

食と緑の科学資料館
「ゆりの木」

附属図書館

繊維学部資料館
真綿・蚕糸館

旧松本歩兵第五十連隊
糧秣庫
(医学部資料室)

本部・学部

大学史資料センター

おわりに

開催にあたって

信州大学は、長野県内の各地に開校された様々な前身校に由来し、1949年の新制大学の設置に伴い信州大学の各学部として再編され、80年近く経とうとしています。学内には、これらの前身校からの歴史ある多様な資料が数多く引き継がれていますが、これまでは前身校の流れを汲む各部局内において管理・収蔵されてきました。これらの歴史ある資料類に加え、今日までの教育や研究成果に伴う最先端の資料類も付加されながら、学内それぞれの資料館・博物館的組織の中で維持・管理されております。

こうした背景下、本学の第4期中期目標・中期計画のもとに策定された「信州大学改革実行プランinGEAR 2022-2024」には「総合博物館構想」が盛り込まれ、その後に更新された「信州大学改革実行プラン inGEAR 2nd STAGE 2025-2027」にも引き継がれ、学内の資料館・博物館的機能を有する組織の連携に向けた準備を進めて参りました。

今回の企画展は、こうした流れのなかで設置された「信州大学総合博物館準備会」が主催する初めての企画展となります。教育学部附属志賀自然教育研究施設、自然科学館、食と緑の科学資料館「ゆりの木」、繊維学部資料館、真綿・蚕糸館、附属図書館、大学史資料センターなどが連携し、それぞれが保管する「お宝」とも言うべき貴重な資料を一堂に集め、公開する運びとなりました。

本学が所蔵する貴重資料は、まだまだたくさんあります。今後、第二弾・第三弾の企画展開催も計画しているところです。また、信州大学の歴史や教育・研究資料を未来に継承し、学内文化施設をつなぐ「信州大学総合博物館」ウェブサイト開設を準備しております。こうした総合博物館構想に基づく活動を通し、新たな「知の創出」を促進して参ります。

最後に、本企画展の開催にあたり、多大なるご協力をいただきました学内外の関係者の皆様に感謝申し上げます。

2025年10月31日

信州大学総合博物館準備会

東城幸治

信州大学のキャンパスと博物館施設



信州大学総合博物館準備会

教育学部附属志賀自然教育研究施設

自然科学館

食と緑の科学資料館「ゆりの木」

繊維学部資料館、真綿・蚕糸館

附属図書館

大学史資料センター

協力（資料・情報提供）

医学部 (考古資料)

長野県埋蔵文化財センター

人文学部 (思誠寮の瓦)

工学部 (長野工業専門学校文書)

農学部同窓会

NPO法人絹の文化・蚕都常田館

できごと



信州大学

前身校から現在まで



松本高等学校 (大8.4)



松本医学専門学校 (昭19.3) 松本医科大学 (昭23.2)

信州大学 (昭24.6.1)

文学部 (昭24.6)

文学部 (昭41.4)

文学部 (昭53.6)

経済学部 (平28.4)

経済学部 (昭53.6)

理学部 (昭41.4)

医学部 (昭24.6)

医学科

医療技術短期大学部 (昭49.6)

保健学科 (平成14.10)

附属病院 (昭24.6)

教育学部 (昭24.6)

教育システム 研究開発センター (平7.4) 共通教育センター (平7.4)

高等教育 システムセンター (平15.4)

全学教育機構 (平18.4)

筑摩県 師範講習所 (昭6.5) 筑摩県 師範学校 (昭7.10) 長野県 師範講習所 (昭6.8) 長野県 師範学校 (昭8.12)

長野県 師範学校 (昭19.9)

長野県 師範学校 (昭31.4)

松本女子師範学校 (昭35.4)

長野県 農業補習学校 教員養成所 (大7.4)

長野県 立青年学校 教員養成所 (昭10.4)

長野県 青年師範学校 (昭19.4)

長野高等工業学校 (昭18.3) 長野工業専門学校 (昭19.4)

工学部 (昭24.6)

長野県 立農林専門学校 (昭20.2)

農学部 (昭24.6)

上田蚕糸専門学校 (昭43.3)

上田繊維専門学校 (昭19.4)

繊維学部 (昭24.6)



教育学部附属 志賀自然教育研究施設





教育学部附属志賀自然教育研究施設

志賀自然教育研究施設（志賀施設）のはじまりは、1954（昭和29）年、教育学部の学生実習の拠点となる山小屋でした。地域からの植物園建設の要望に応え、1962（昭和37）年には自然観察路、ロックガーデン、資料館の整備が教育学部の教員と学生の手作業で始まりました。さらに1965（昭和40）年には厚生省（現・厚生労働省）および長野県によって正式に自然歩道が整備され、翌年の1966（昭和41）年に文部省（現・文部科学省）の認可を受け、附属研究施設として正式に発足し、現在に至ります。

志賀施設は志賀高原・志賀山北麓に位置しています。この一帯は1980年に「生物圏保存地域（ユネスコエコパーク）」として日本で最初期に登録された地域の一つです。周辺には亜高山帯針葉樹の原生林が広がり、分園の「カヤノ平ブナ原生林教育園」（木島平村）には日本有数のブナ林が残されています。こうした自然環境により、教育・研究・自然保護の三位一体を実現する貴重なフィールドとなっています。

教育面では、教育学部生の必修科目である「環境教育」の自然教育実習をはじめ、他大学の教育プログラムも行われています。研究面では、生態学・地球科学など幅広い分野の野外研究が展開され、環境省の「モニタリングサイト1000」の調査サイトともなっています。施設本館には研究室・講義室・実験室のほか、宿泊室が備えられています。また自然観察路（約3.5km）、剥製を展示する資料館、高山植物のロックガーデンが併設されており、無料で一般公開しています。

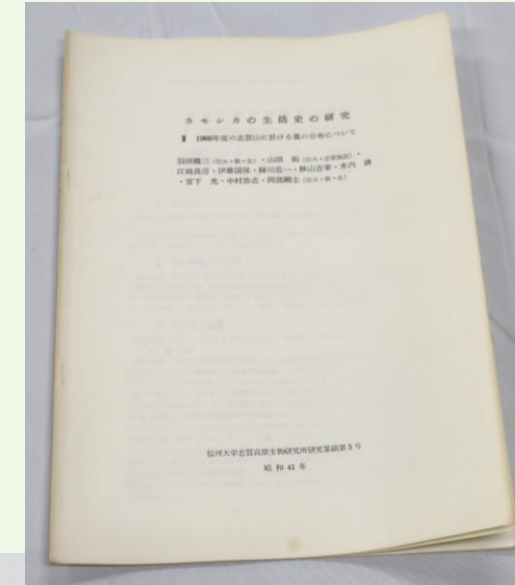


Webサイト: <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/shiga/index.html>

 信州大学志賀自然教育園（通称）

No.1 『Ecosystem analysis of the subalpine coniferous forest of the Shigayama IBP area, central Japan』
(志賀山IBP地域における亜高山帯針葉樹林の生態系解析)

1977(昭和52)年
東京大学出版会
北沢 右三
日本学術会議国際生物学事業計画特別委員会
International Biological Programme
中央図書館 蔵



No.2 『Summary report on the contribution of the Japanese National Committee for IBP, 1964-1974』

1978(昭和53)年
東京大学出版会
日本学術会議国際生物学事業計画特別委員会
田宮 博
International Biological Programme
中央図書館 蔵



「国際生物学事業 (IBP: International Biological Program)」は、1964年から1974年まで、世界規模で実施された大規模な国際共同研究プロジェクト。IBPは57カ国以上が参加した国際共同研究事業であり、とくに日本においては生態学発展の大きな契機となった。志賀高原には「志賀山IBP特別研究地域」が設けられ、志賀施設はその研究拠点として活躍した。資料はその研究報告書である。

No.3 野帳「SKETCH BOOK」

1965(昭和40)年

1966(昭和41)年

教育学部附属志賀自然教育研究施設 蔵

1965年9月～10月の10日間、調査員10名による志賀山におけるカモシカの糞の分布調査が行われた。

野帳には、粒数、環境などの測定値が記録されている。

1959(昭和34)年の発売から形を変えずに使い続けられている
コクヨ株式会社の野帳(165×95×6mm)

元々は測量用に作られたものだが、屋内外問わず様々な調査記録に使われた。



No.4

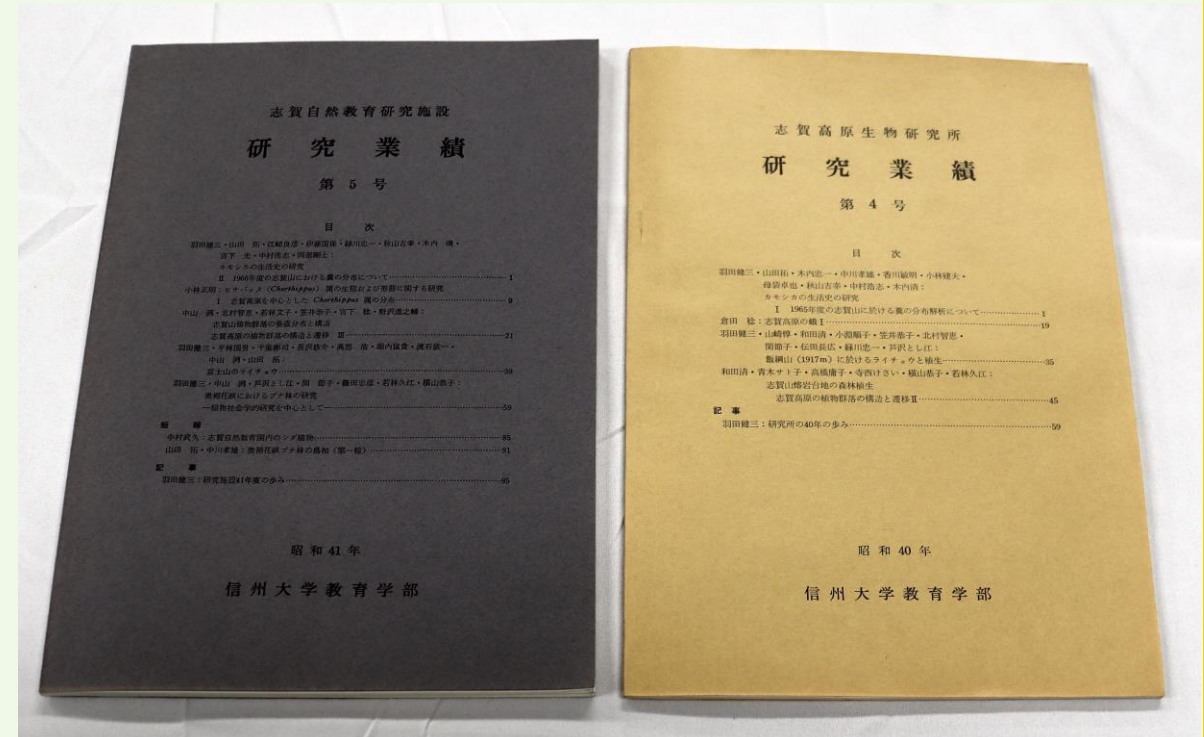
志賀高原生物研究所『研究業績』第4号 志賀自然教育研究施設『研究業績』第5号

1965(昭和40)年
1966(昭和41)年
信州大学教育学部 発行

教育学部附属志賀自然教育研究施設 蔵

IBPのプロジェクトにおいて教育学部の学生らが研究に関り、盛んに研究が行われ報告書が出された。
1966(昭和41)年に文部省の認可をうけて、「志賀高原生物研究所」から「信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設」に改名されている。

志賀高原生物研究所『研究業績』1号～4号 信州大学 附属図書館OPAC
志賀自然教育研究施設『研究業績』5号～37号 信州大学 附属図書館OPAC



No.5 登録博物館・指定施設証書

2023(令和5)年5月
文化庁企画調整課博物館振興室 発行

教育学部附属志賀自然教育研究施設 蔵

1970(昭和45)年、文部省(現文部科学省)より博物館相当施設として認可を受けた。
2023(令和5)年4月から施行の改正博物館法施行に合わせ、共通の「登録博物館等マーク」が作成され、全ての登録博物館・指定施設に対して証書が配布された。



国際生物学事業 実験研究室

「志賀山IBP特別研究地域」の研究拠点として、
1968(昭和43)年に建設された建物のひとつ



「国際生物学事業計画 実験研究室」と書かれた出入口横にある看板
(約75cm×15cm)

風雪にさらされ経年劣化が進み、文字がわずかに読める程度である。
今後の保存が検討される。

ニホンカモシカ剥製

(資料館での展示の様子)

1950年代、ニホンカモシカは乱獲により個体数が激減し、幻の動物となっていた。志賀施設ではこの時期に、ニホンカモシカの大規模な糞塊調査が行われ、生息密度や行動域の推定など、後の生態研究の礎となった。



「資料館」：志賀自然教育園内に生息する哺乳類や鳥類の剥製をはじめ、写真や解説パネルを展示している。



120×140×60 [cm]



自然科学館



自然科学館

2012(平成24)年8月に開設された信州大学自然科学館には、信州大学の前身校である旧制松本高等学校や松本女子師範学校から引き継がれている貴重資料があります。それらの資料のほか、理学部の教員と学生により発見された化石やミエ(シンシュウ)ゾウのレプリカ、岩石標本や、信州大学文理学部から使われてきた化学教育を支えた計測装置などを収蔵・展示しています。

なかでも約40万点におよぶ植物標本は、国立科学博物館と連携のもと、国際的なデータベースへの登録を実施し公開しています。また、国内でも類を見ない標本数である雷鳥の剥製や高山植物標本を遺伝子解析の研究に活用しています。

これらの研究成果を中心に、学外施設でのサテライト展示などを行い、小中高校生・市民向け体験学習事業の実施等、教育研究活動への協力を行っています。

身近な科学現象から信州の自然、そして地球全体の環境変化まで、様々なスケールの自然と科学現象をわかりやすく展示しています。また、理学部の学生が少しずつ手を加えて展示を改良してくれています。

Webサイトでは、バーチャル展示室を公開しているので、館内の様子や標本類をいつでも見ることができます。

事前に連絡をして見学することができます。



Webサイト: <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/science/museum/index.html>



信州大学自然科学館

No.6

シンシュウゾウ(ミエゾウ) 頭蓋骨化石 (復元レプリカ)

500万年前
自然科学館 蔵

長野県の旧中条村(現長野市)に分布する約300～500万年前の地層から、信州大学理学部地質学科の学生によって発見されたシンシュウゾウ(ミエゾウ)の頭骨の化石である。

上顎の歯も残っているため、貴重な標本である。現在は絶滅している。

下に置かれた鏡に臼歯のギザギザ模様が映っているのが見える。



130×130×150 [cm]

No.7

合成染料標本

製造年・製造元不明
自然科学館 蔵

旧制松本高等学校(1919-1949)で使われたもの。
天然染料に替わる合成染料は英国のパーキンが発明したモーブが有名であるが、合成染料の研究と製造はドイツで発展した。
天然染料にはない様々な色調と、60年以上たった今でも経年変化しない安定した発色が特徴である。



合成染料標本
旧制松本高等学校(大正8年から昭和24年)で使われたもの(製造元不明)。天然染料に替わる合成染料は英国のパーキンが発明したモーブが有名であるが、合成染料の研究と製造はドイツで発展した。天然染料にはない、さまざまな色調と60年以上たった今でも経年変化しない安定した発色が特徴である。

No.8 元素標本

製造年不明・メルク社(ドイツ)製
自然科学館 蔵

旧制松本高等学校(1919-1949)で使われたもの。
標本にはかつて元素とみなされていた「ジジム」が
収められている。ジジムはネオジムとプラセオジムの
混合物であると記されている。
元素記号の表ではヨウ素に対し「J」が使われている。
ドイツから科学を学んだ時代が思い起こされる。



No.9 ライチョウ標本(剥製)①

明治～大正時代

高山製作所標本部 / 高山動物標本製作所

自然科学館 蔵

ライチョウは早く1923年に国の天然記念物に指定され、戦後も特別天然記念物に指定されている。

自然科学館のライチョウ標本は、長野県松本女子師範学校初代校長矢澤米三郎らが、明治末から大正期に採取したもので、近年の遺伝子解析により多くが北アルプス産であることが確認された。

季節に伴う換羽状況がわかるほか、成体の骨格標本や千島産の本剥製は他に類がないもので、極めて貴重な資料である。矢澤著『雷鳥』（1929年 岩波書店）の口絵写真や図版の元にもなっている。

これらは松本女子師範学校の旧蔵資料であり、戦後、教育学部松本分校標本室を経て、旧教養部に長い間保管されていたもので、医学部赤レンガ倉庫を経て、自然科学館の所蔵となったものである。

収集時から100年以上経過しており、経年の劣化もみられ、その補修も今後の課題である。



オス 冬羽

1908(明治41)年11月17日 採集

キジ目キジ科 Lagopus muta

メスと同じく、真っ白ですが、目の周りや目先が黒いのがメスとはちがっています。

No.9 ライチョウ標本(剥製)②

明治～大正時代
高山製作所標本部 / 高山動物標本製作所
自然科学館 蔵



メス

1918(大正7)年7月 採集
キジ目キジ科 Lagopus muta

若鳥と羽色は似ていますが、少しちがいます。比べてみましょう。

ヒナ(中央)

年不明・7月 採集
キジ目キジ科 Lagopus muta

夏のハイマツ帯にとけこむ色をしています。
産まれた時から羽毛があり、自分で動き回ることができます。目立つようにみえる色合いも、高山帯では植物や木の陰にうまくとけこみ、天敵から見つかりにくくなっています。



若鳥(左)

年不明・8月 採集
キジ目キジ科 Lagopus muta

メスとよく似ていますが、ヒナが成長した若鳥です。まだ幼さが残ります。お母さんとくらべてみましょう。

メス 夏羽(右)

年不明・9月 採集
キジ目キジ科 Lagopus muta

夏のハイマツ帯にとけこむ色をしています。

ライチョウのオスとメス

雄（オス）

雌（メス）



オスとメスが夫婦となり、卵を産み、ひなを育てる時期を繁殖期（はんしょくき）といいます。この時期のライチョウは、羽の色でオスとメスを見分けることができます。オスは全体に黒味が強く、目の上には、赤く発達した、ひふが目立ちます。これを肉冠（にくかん）と呼びます。メスは、茶と黒が細かくまざった色合いで、肉冠は細く、目立ちません。

冬になると、オスメスともに、まっ白な羽に生えかわります。一見、オスもメスもそっくりですが、オスには黒い過眼線（かがんせん）が入っていることで、見分けることができます。



展示構成に戻る▶

絶滅したとされる中央アルプスの集団が、遺伝的に北もしくは南アルプスのどちらに近いのか、この謎を解決する糸口は、長野県上伊那郡宮田小学校で見つかった、西駒ヶ岳のライチョウの剥製（はくせい）にありました。今から約100年前の大正12年（1922年）につくられたものです。



Photo by I Nishitani
中央アルプス産のライチョウの剥製



足裏のひふを採取してDNAを取り出す

剥製を台座から外し、足裏のひふを採取してDNAを取り出して解析をしました。結果、北アルプスから乗鞍地域に生息するライチョウのDNAの特徴と一致しました。

私たちは過去に戻ることはできません。今ではもう手に入らない情報を、剥製が私たちに教えてくれたのです。

剥製を手掛かりにした 絶滅集団の遺伝子解析



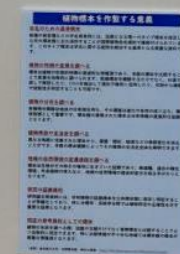
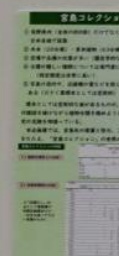
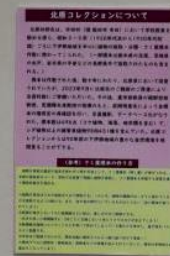
中央アルプスで発見されたメスと、過去に同じ地域で採集されたライチョウの剥製の遺伝子解析から、中央アルプスへ再導入するライチョウは、遺伝的特徴が似ていて、地理的にも近く、また生息数も安定している乗鞍岳から連れて行くことが決まったのです。

資料提供：
理学部
笠原里恵 助教

食と緑の科学資料館 「ゆりの木」



食と緑の科学資料館 「ゆりの木」





食と緑の科学資料館「ゆりの木」

農学部が所蔵する植物・動物の貴重な資料や標本を一元管理・活用する目的で、農学部創立60周年記念事業として、2007（平成19）年5月に設置され、卒業生・教職員・企業・地域住民の協力により開館しました。

資料館は平屋建て延べ約600㎡、4つの展示室と収蔵室、研修室（最大80人程度）、農産物販売所・サロン、事務室から構成されています。各展示室には『人と地球にやさしい食と緑；地域資源を活かして』を展示コンセプトとして、野生動物との共存や家畜と人間生活との関わり合い、信州の自然といったテーマごとに資料や標本が紹介されています。

収蔵する資料、標本は学内での教育・研究に利用するだけにとどまらず、広く社会教育や生涯教育（公開講座）、さらには子供たちの自然教育にも解放し、活用することを目指しています。

また、玄関隣の販売所では、農学部の農場で生産された種々の穀類や季節の野菜、果物、それらの加工品の販売も行い、「食」に関する生きた標本の展示場にもなっています。

平日の午前10時～午後4時に開館しており、どなたでも入館できます。

Webサイト: <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/agriculture/institutes/yurinoki.php>



 食と緑の科学資料館「ゆりの木」

宮島コレクションについて

宮島吉彦氏は、長野県立農林専門学校（信州大学農学部の前身）の農科を1948（昭和23）年に卒業され、おもに定年退職後から2006年にご逝去されるまで、植物の採集・分類・標本作成に携わってこられた。

2007年8月、ご遺族から信州大学農学部への寄贈の申し出を受け、同校の植物分類学担当教員の手で検分を一点一点進めた。その結果、標本は全63分冊にファイルされ、標本数は4,836点で、シダ植物以上の維管束植物176科2,209種を含んでいた。個人で収集、管理しているものとしては膨大な数であり、植物の分類や生態についての非常に貴重な資料といえる。



カズヨシ イシノミ 静岡県河津町
（左）宮島吉彦氏と奥様
2002年2月21日
・静岡県河津町にて
木本編第8冊の貼付写真より



（上）さまざまな書き込み
・写真貼付のある標本



（下）複数の植物種の
形態比較標本

宮島吉彦氏 略歴

昭和 4年（1929年）3月2日生まれ
昭和23年（1948年）長野県立農林専門学校 卒業
長野県農業試験場作物部 勤務
昭和34年（1959年）同 飯山試験地 勤務
昭和55年（1980年）同 南信農業試験場 勤務
昭和56年（1981年）長野県農業総合試験場保鮮流通室長
昭和60年（1985年）長野県花き試験場 場長
昭和62年（1987年）長野県職員 退職
日本植物調節剤研究協会長野第一試験地嘱託
平成 6年（1994年）同 退職
平成18年（2006年）12月7日逝去（享年77歳）

宮島コレクションの特徴

- ① 長野県内（全体の約8割）だけでなく、北海道～沖縄にわたる日本各地で採集
- ② 木本（20分冊）・草本植物（43分冊）とも充実
- ③ 変種や品種の収集が多い（園芸学的な興味からか）
- ④ 分類の難しい種群については専門家に同定を依頼（同定精度は非常に高い）
- ⑤ 写真の添付や、近縁種の葉などを同じ台紙に配置した形態比較もある（※さく葉標本としては変則的）

標本としては変則的な面があるものの、このことがむしろ、地道な試行錯誤を続けながら植物分類を極めようとした在野の科学者の真摯な学究の足跡を物語っている。

本企画展では、宮島氏の偉業と努力、ご遺族・関係者の皆様のご厚意をたたえ、「宮島コレクション」の世界の一部を公開するものである。

宮島コレクションの内訳

1) 植物分類学上の内訳

分類	シダ植物門		種子植物門				計
	裸子植物 門	被子植物門	被子植物門				
			双子葉植物綱		単子葉 植物綱		
			離弁花類	合弁花類			
科	24	7	90	37	18	176	
種	119	24	972	632	462	2209	
亜種	1	0	5	12	4	22	
変種	8	2	98	63	31	202	
品種	0	1	50	28	5	84	
栽培品種	0	0	2	0	0	2	

2) 採集時期別の内訳

※「記載なし」は、主として複数種の形態比較標本など（日付を統一できない性質のもの）。

採集年	月												計	
	(記載なし)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		12
(記載なし)	28													28
1984										12				12
1986							1				3			
1987	1								1			3		5
1988	2				2		10		1	6	4		1	26
1989	3		4		5	5	6		3	6	6	10	10	58
1990	3		7	3	41	32	24	52	38	28	30			258
1991	1		13	6	20	19	8	35	65	48	23	39	2	279
1992			21	33	16	37	65	70	110	32	13	20		417
1993				23	20	60	42	25	76	5	35			286
1994						17	83	96	136	43				375
1995					8	69	96	70	77	45	79			444
1996			1		29	33	57	96	69	77	33			395
1997			1	6	24	49	43	70	49	62	44	33		381
1998			1	9	41	68	59	58	62	62	61			421
1999			1	31	27	78	68	82	46	37	35			405
2000					26	59	68	38	49	20	43			303
2001				4	8	32	49	42	47	40	32			254
2002	1	1		5	31	30	42	28	22	18	20			198
2003	1	2		3	4	36	20	16	10	15	22	1		130
2004		3		30	2		6	14	7	10	16			88
2005	1				1	7	13	17	2	10	10	1		62
2006						1	4			1				7
計	41	6	49	153	306	635	760	810	870	577	509	107	13	4836

北原コレクションについて

北原四郎氏は、市田村（現 飯田市 市田）において学校教員を勤める傍ら、昭和3～5年（1920年代末から1930年代初頭）ごろに下伊那地域を中心に植物の採取・分類・さく葉標本作製に携わってこられた。（一部標本は栃木県の足尾、茨城県の水戸、岩手県の平泉などの長野県外で採取されたものも含まれる。）

標本は作製された後、数十年にわたり、北原家において保管されていたが、2023年9月に北原氏のご親族のご厚意により当資料館にご寄贈いただいた。その後、農学部教員の岡野哲郎教授、荒瀬輝夫准教授の指導のもと、武岡明里氏によって全標本の種同定の再確認を行い、写真撮影、データベース化がなされた。標本数は496点（コケ植物、海藻、地衣類を含む）で、シダ植物以上の維管束植物98科451種を含んでいた。北原コレクションからは90年前の下伊那地域の豊かな自然環境を垣間見ることができる。

（参考）さく葉標本の作り方

植物を特別な薬品や道具を使わずに残す方法として、さく葉標本（押し葉）が挙げられる。農学部の森林系のコース・学科では実習で実際に植物を採取し、さく葉標本を作製する演習を通して種同定能力を高める。

- ①植物を剪定ばさみや高枝ばさみで採取する。このとき、植物の種類がはっきりと表れているものを採取するよう心掛ける。また、虫や虫の卵がついているものはとらない（虫に標本が食べられてしまう）
- ②乾燥が進行しないうちに新聞紙などに挟み、重しをのせて乾燥させる。
（水分を吸った新聞紙を2・3日ごとに交換しないと色とりどりのカビが生えてしまう）
- ③新聞紙交換時にピンセットなどを用いて折れてしまっている葉などを伸ばし、茎や枝をバランスよく配置する。
- ④半年ほど乾燥させたのち、標本台紙に標本ラベルと一緒に貼り付けて完成！！
※標本ラベルに採取日・採取地点・採取者などの情報が記入されていないと、標本の学術的な価値はなくなってしまう。

北原コレクションの特徴

- ① 標本作製技術が高く、蕾、花、果実にカビが生えることなく、さく葉標本が丁寧に作製されている。
- ② 河川改修や土地開発によって湿地や草地が失われる以前のさく葉標本が含まれている（現在では絶滅危惧種に指定されている種も含まれる）。
- ③ 暖地・低地に分布する種と寒冷地・亜高山に分布する種の両方のさく葉標本が含まれ、下伊那の自然環境やそこに生育する種の多様性を物語っている。
- ④ 自宅や校庭に植えられていた植物のさく葉標本も含まれる。
- ⑤ 標本台紙に和紙が用いられている。
- ⑥ 90年以上前のさく葉標本が非常にきれいな状態で保存されている。

90年以上前の資料・資源が非常に限られていた時代にも関わらず、種同定が適切に行われ、さく葉標本が丁寧に作成されている点は特筆すべき点である。北原氏が本職の傍ら、当時の先端的研究活動をなさっていたことがわかる貴重な資料である。

宮島コレクションの内訳

植物分類学上の内訳

分類	シダ植物門		種子植物門				計
	裸子植物門		被子植物門				
			双子葉植物綱		単子葉植物綱		
			離弁花類	合弁花類			
科	16	1	44	21	16	98	
種	42	6	161	129	113	451	
亜種	2	0	4	1	3	10	
変種	2	3	47	35	24	111	
品種	0	3	0	2	0	5	
栽培品種	0	3	0	2	0	5	



ノリウツギ



ウリカエデ



ホトトギス



サクラソウ

植物の分類について

わが国は南北に細長く、海岸～高山・乾燥地～沼沢地まで多様な環境がそろっており、かつ地質的にも入り組んでいるため、日本固有種を含む数多くの植物種（およそ8,000～9,000種類）が自生しています。

植物は大きさも小さく大きくてもありますが、大きな役割として、太陽のエネルギーを利用して物質生産を行い、二酸化炭素を吸収して酸素を出します（光合成）。これは人間をはじめとする他の生物にとって不可欠であり、餌だけでなく快適な生息場所も提供してくれます。したがって、野生の哺乳類・鳥類・昆虫類などを調査・研究する上でも、そこに生えている植物の情報は重要な意味を持ちます。

分類は、つきつめると「その生き物は何という名前か？」ということですが、生物の多様性を整理して理解するための学問です。「種名がわかる」ことは、もちろん生物学・生態学で威力を発揮しますが、じつはそれ以外の分野（考古学、民俗学・・・）でも大きく役立ちます。

植物は一般に「木本」「草本」と分けられたり、「離弁花類」「合弁花類」と分けられたりしますが、この分け方は便宜上のものです。

同じ科（Family）や属（Genus）に、木と草の両方があるものも少なくありません（例えば、サクラとイチゴは同じバラ科）。また、進化の過程でいうと、離弁花類が原始的で合弁花類がより進化したグループですが、さまざまなルーツのものがそれぞれ進化して花弁が合生したものを「合弁花類」と称しているだけです。

現在の分類学の基礎を築いたのはリンネで、学名（ラテン語による二名法）と階層的分類：界→門→綱→目→科→（連）属→（節）種というシステムはあらゆる生物に適用されています。

植物は動けないため、生き残るために環境に合わせて形を変えます。同じ種であっても変異が大きく、自家受粉や栄養繁殖によって地域的な集団も分化しやすいです。つまり、動物と比べると、種より下位の分類：亜種→変種→品種を記載します。なお品種（≠園芸品種）は、白花、斑入りといった程度の違いです。

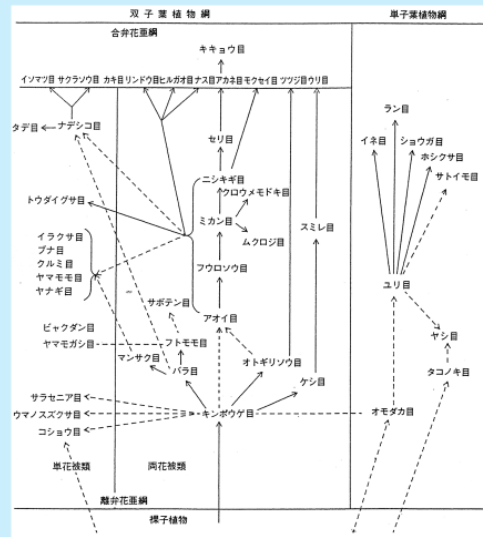


図 被子植物の系統図（北村 1952）
実線：一般に認められているもの、破線：異説のあるもの、
「目」（もく）とは、科より上位のレベルの分類。

一般には、科より下位の分類で示すのがふつう。
学名は、属名・種小名・命名者で表記します。
例) *Trifolium repens* L. (=シロツメクサ)
属名 種小名 命名者

植物標本を作製する意義

命名のための基準標本

新種や新変種などの学名発表時には、証拠となる唯一のタイプ標本を指定し、公共の標本館に永久保存することが国際植物命名規約で義務付けられています。このタイプ標本は学名に関する疑問を解決する基準となる貴重な資料です。

植物の特徴や変異を調べる

標本は植物の形態的特徴の直接的な情報源であり、多数の標本を比較することで変異を効率的に調べられます。乾燥標本を観察するだけでなく、お湯で戻して解剖したり、DNAを抽出して遺伝子解析に活用したり、花粉から雑種や倍数性を判定することも可能です。

植物の分布を調べる

各植物分類群は独自の分布域を持ち、その調査は進化や自然の成り立ち、環境指標として重要です。標本館の蓄積された標本は分布情報の直接的な証拠となります。

植物季節や生活史を調べる

異なる時期に採集された標本から、展葉・開花・結実などの季節変化を知ることができ、多数の標本観察によってその植物の生活史全体を解明できます。

地域の自然環境の変遷過程を調べる

標本は生物がその時その場所に生きていた証拠であり、絶滅種、過去の植生環境、外来植物の移入など、地域の自然環境の歴史的変化を知る手がかりとなります。

研究の証拠資料

研究論文発表時には、材料植物の証拠標本を公共標本館に保存し明記することが常識化しており、特に分類学・系統学分野では植物同定の正確性を示す重要な証拠となります。

同定の参考資料としての標本

植物の名前を調べる際、図鑑や文献だけでなく実物標本と比較することでより効率的に同定できます。特に文献情報が不十分な地域では標本館の標本が貴重な情報源となります。

「絶滅危惧種」ってなに？

植物に関する話題で、「絶滅危惧種」という言葉をよく耳にするとおられます。
では、絶滅危惧種とはいったい何なのでしょう？

よく耳にする絶滅危惧種とは、環境省がまとめた『レッドリスト』に掲載される野生生物のことを指します。
レッドリストでは、絶滅のおそれの程度に応じて、種ごとに以下のとおりカテゴリー分けをして評価しています。

表.環境省レッドリストのカテゴリー

絶滅 (EX)	わが国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅の危機が増大している種
準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
情報不足 (DD)	評価するだけの情報が不足している種
絶滅の恐れのある地域個体群 (LP)	地域的に孤立している個体群で、絶滅の恐れが高いもの

レッドリストの各カテゴリーは、アルファベットの略語でもあらわされます。

【EX】：Extinct, 【EW】：Extinct in the Wild, 【CR】：Critically Endangered, 【EN】：Endangered, 【VU】：Vulnerable, 【NT】：Near Threatened, 【DD】：Data Deficient, 【LP】：Threatened Local Population

日本では維管束植物・蘚苔類・地衣類・菌類の5分類群の合計で、絶滅危惧種に2,063種が指定されています（2025年3月18日、第5次レッドリストより）。

こうしたレッドリストは長野県においても作成されています。2014年現在、維管束植物・蘚苔類・地衣類・菌類の5分類群の合計で、絶滅危惧種に1093種も指定されています（長野県版レッドリスト（植物編）2014より）。
維管束植物だけでみても、絶滅危惧種は882種と、長野県に生育する在来植物約3000種のうち27%にあたります！

現在の状態を回復させるためには活動者が無理せず、保護・保全活動を継続するための技術、仕組みの開発が求められます。標本を通して一人ひとりにできることは何かを考えるきっかけにいただければ幸いです。

ハナノキ

学名：Acer pycnanthum K.Koch;
A.Rubrum L.var.pycnanthum (K. Koch) Makino
ムクロジ科
環境省レッドデータブック：絶滅危惧Ⅱ類(VU)
長野県レッドデータブック：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

1995(平成7)年・1996(平成8)年、大町居谷里 採集
食と緑の科学資料館「ゆりの木」蔵

<分布域>

愛知県北東部・岐阜県南部・長野県南部・長野県大町市

<生態・特徴>

雌雄で株が異なるカエデの仲間。愛知県・岐阜県・長野県の3県境の山間の湿地に散生する日本固有種。本標本は隔離分布地の大町市にて採取された。花卉は4月で深紅の花が束状に3~6開花する。

ハナノキが減少した原因としては、生育地の湿地が住宅、工場、ゴルフ場やスギヒノキの人工林などに開発されてしまったことが挙げられる。ハナノキ節の仲間は、第三紀の温暖期に北半球の高緯度地域にまで広く分布していたが、度重なる氷河期を耐えて生き残ったのは、北米に分布する *Acer rubrum* と *Acer saccharinum* に加え、日本のハナノキの3種のみである。



No.10 宮島コレクション (さくよう 腊葉標本) ②

ヤナギモ

学名：Potamogeton oxyphyllus Miq
ヒルムシロ科

長野県レッドデータブック：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2001 (平成13) 年、軽井沢駅南ゴルフ場 採集
食と緑の科学資料館「ゆりの木」 蔵

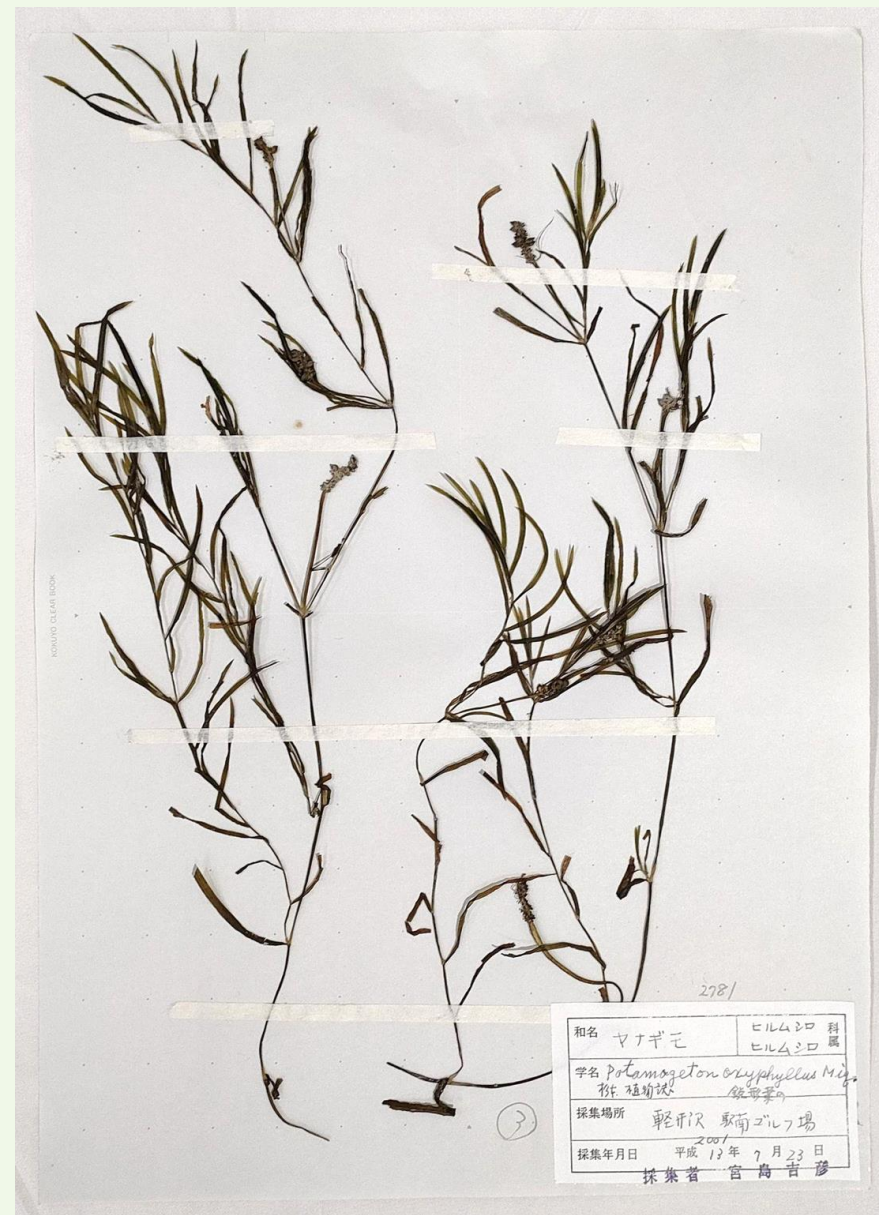
<分布域>

北海道～九州・朝鮮・中国

<生態・特徴>

淡水の湖沼や河川、水路の流水域に生える沈水性の多年草。茎が細く、よく分枝する。和名は葉がヤナギ科樹木の葉に似ていることに由来する。本種は流速によって結実しやすさが異なり、本標本では多くの果実が確認できる。本種はヒルムシロ属植物では普通種であるが、長野県内では除草剤や外来の競合種、河川整備の影響で数を減らしている。

本標本はかつて湿地帯であった軽井沢のゴルフコース (ラベルに記載の位置的に軽井沢プリンスホテルゴルフコース?) 内の池で採取されたものである。ゴルフ中にも関わらず (?) 採取を行った宮島氏の植物採取に対する情熱がうかがえる。



北原コレクション (腊葉標本) ①

タヌキマメ

学名: *Crotalaria sessiliflora* L.

マメ科

長野県レッドデータブック: 絶滅危惧IA類 (CR)

1929 (昭和4) 年、吉田朽道 採集
食と緑の科学資料館「ゆりの木」蔵

<分布域>

本州 (東北地方南部以西) ~ 琉球・朝鮮・中国・東南アジア

<生態・特徴>

平地、日当たりの良い草地、道端に生える一年草。全体に褐色の長い毛がある。花期は7~9月。青紫色の2~20の花をつける。和名の由来はがくに包まれた豆果をタヌキに見立てたものとも、花を正面から見たものともいわれる。

タヌキマメが減少した原因としては、土地開発によって生育地である草地 (採草地・放牧地) が減少したことが挙げられる。



No.11

北原コレクション (さくよう 腊葉標本) ②

カニクサ

学名：Lygodium japonicum (Thunb.) Sw.
カニクサ科

1929(昭和4)年、タツ江 採集
食と緑の科学資料館「ゆりの木」蔵

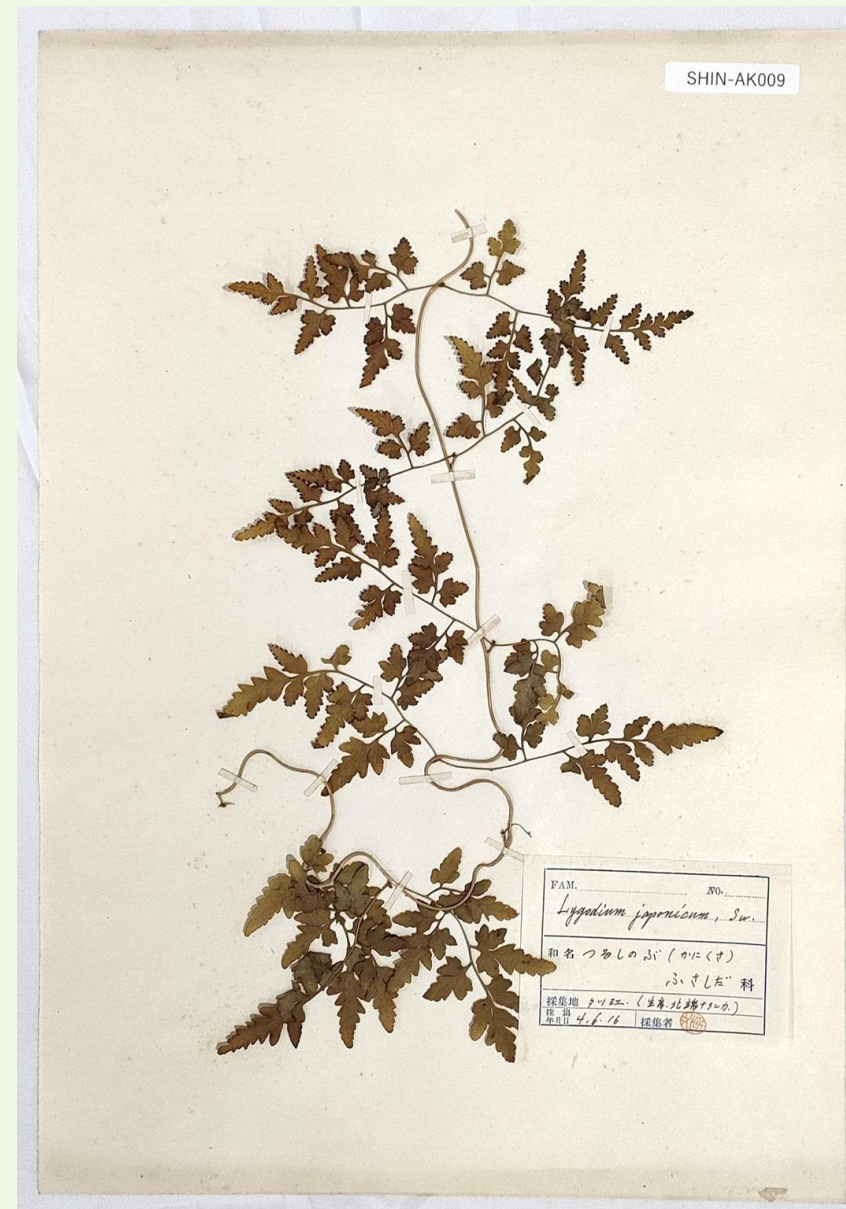
<分布域>

本州(福島県、新潟県以南)～九州・琉球・朝鮮・中国・台湾・南アジア・東南アジア

<生態・特徴>

暖地の山麓や人里に多い、つる状のシダ。根・茎は匍匐し、茎は最大2m以上になることもある。名前は子どもがカニを釣るのにつる状に伸びた本種の長い葉を利用したことに由来する。

長野県は分布の北限ではないが、南信が分布北限と同等の気候条件であるため、飯田以北の寒冷な地域では稀。このため、本標本のラベルには当時不明であった、本種の分布北限を採取地の飯田周辺に疑う、「生育・北端ナランカ。」の記述が確認できる。





附属図書館



附属図書館

1949(昭和24)年5月、信州大学創立とともに附属図書館が設置されました。

長野県内5つのキャンパスには、前身校の特性を引継ぐ6つの図書館(中央・教育・医学・工学・農学・繊維)があり、それぞれ独自の専門性や地域性を持つ資料やサービスを提供しています。合わせて115万冊の蔵書があり、学生・教職員・一般の方を含め、年間58万人が利用しています(2024年度)。また、先輩学生が基礎科学科目や専門科目、レポートの書き方などの相談に対応するなど、教職学協働により学生のニーズに対応した学習支援を実施しています。

図書館では、教育・研究の基盤となる図書・雑誌、電子資料を多数提供するほか、国内有数の山岳関係資料「小谷コレクション」など多くの貴重書や絵画を所蔵しています。

2025年3月には、「信州大学附属図書館デジタルアーカイブ」を公開し、本学が所蔵する古典籍をはじめとする貴重資料のほか、連携する機関から寄託された資料の画像などを公開しました。さらに、地域の図書館・文化施設・研究機関等と連携し、人と人、人と情報の相互作用を生み出す交流の場を提供することで、信州における「知の拠点」の役割を果たしていきます。

Webサイト: <https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/>



附属図書館 (中央図書館)

No.12 晩秋、野尻湖畔

満谷 国四郎

(みつたにくにしろ 1874-1936)

1923(大正12)年

中央図書館 蔵

旧制松本高等学校所蔵絵画

満谷満四郎は、岡山出身。小山正太郎に学び、明治美術会に参加。1902(明治35)年、石川寅二らと太平洋画会を設立。油彩の質感を活かす重厚な画風で歴史画、風俗画を手掛けた。



油彩、カンヴァス 51.5×64.5 [cm]

No.13

雪の諏訪湖の景

柚木 久太

(ゆのき ひさた 1885-1970)

1920(大正9)年

中央図書館 蔵

旧制松本高等学校所蔵絵画

柚木久太は岡山出身。父は日本画家の柚木玉邨。太平洋画会に入り、満谷国四郎、中村不折に学ぶ。旧制松本高等学校の卒業生で染色工芸家の柚木沙弥郎(1922-2024)は次男

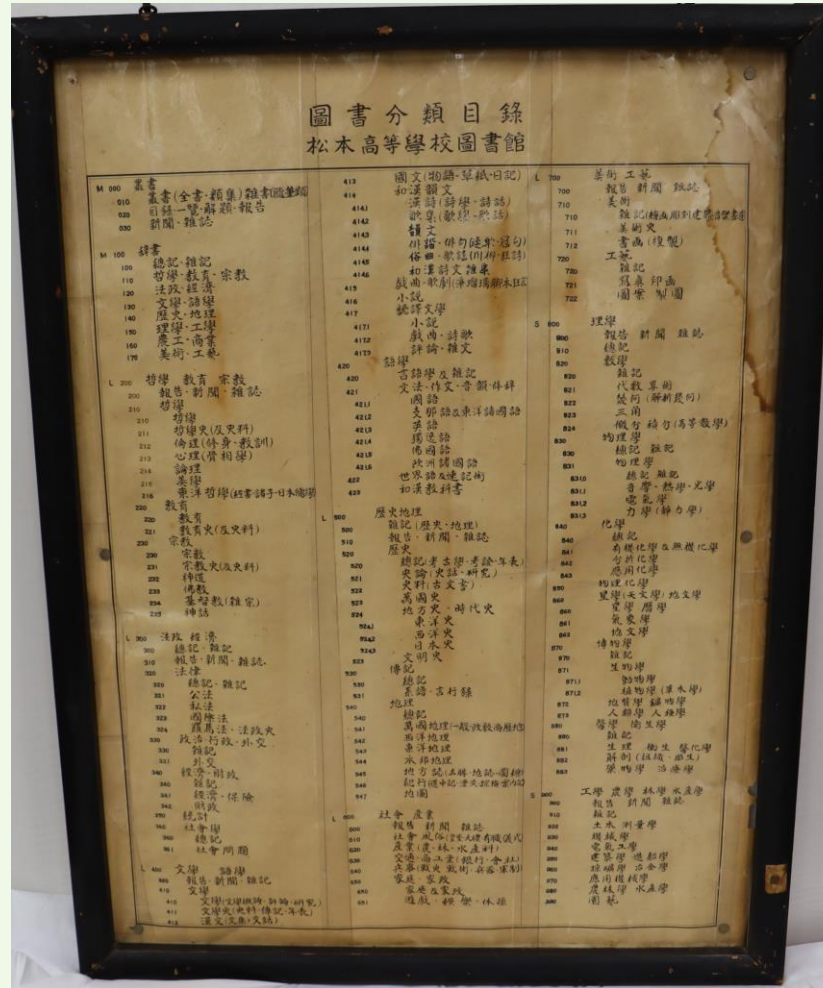


油彩、カンヴァス 45.0×52.0 [cm]

No.14 図書分類目録と分類別蔵書目録

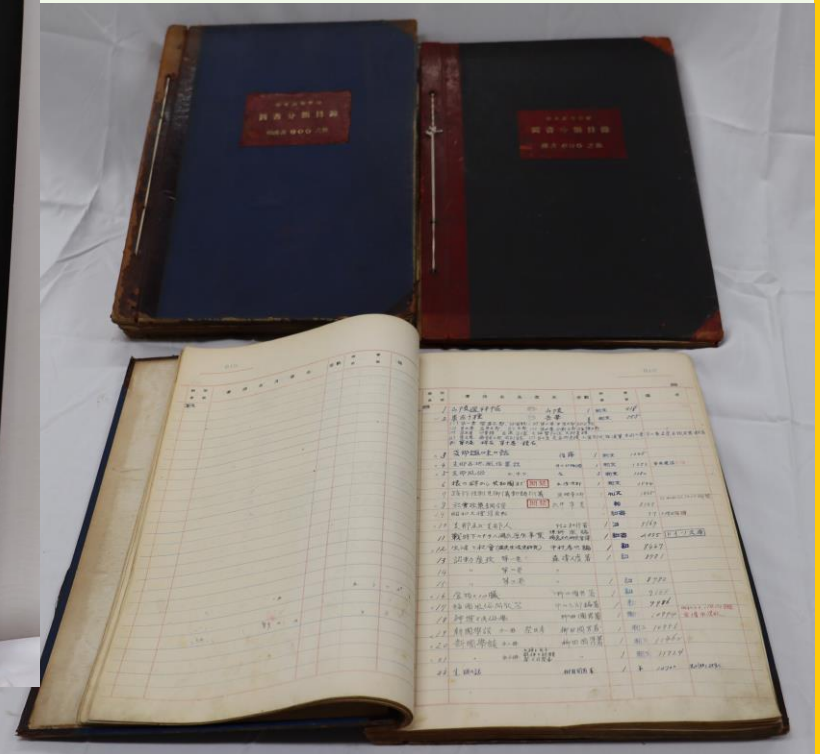
制作年不明
中央図書館 蔵

松本高等学校図書室で使用されていた図書分類表と分類別蔵書目録。現在国内の多くの図書館で使用されている「日本十進分類表(NDC)」は、昭和3(1928)年に発表されたものであり、それ以前からある松本高等学校では独自の分類が用いられていた。分類別蔵書目録は、当時使用されていた分類別蔵書目録で和洋別計20冊からなる。



図書分類目録

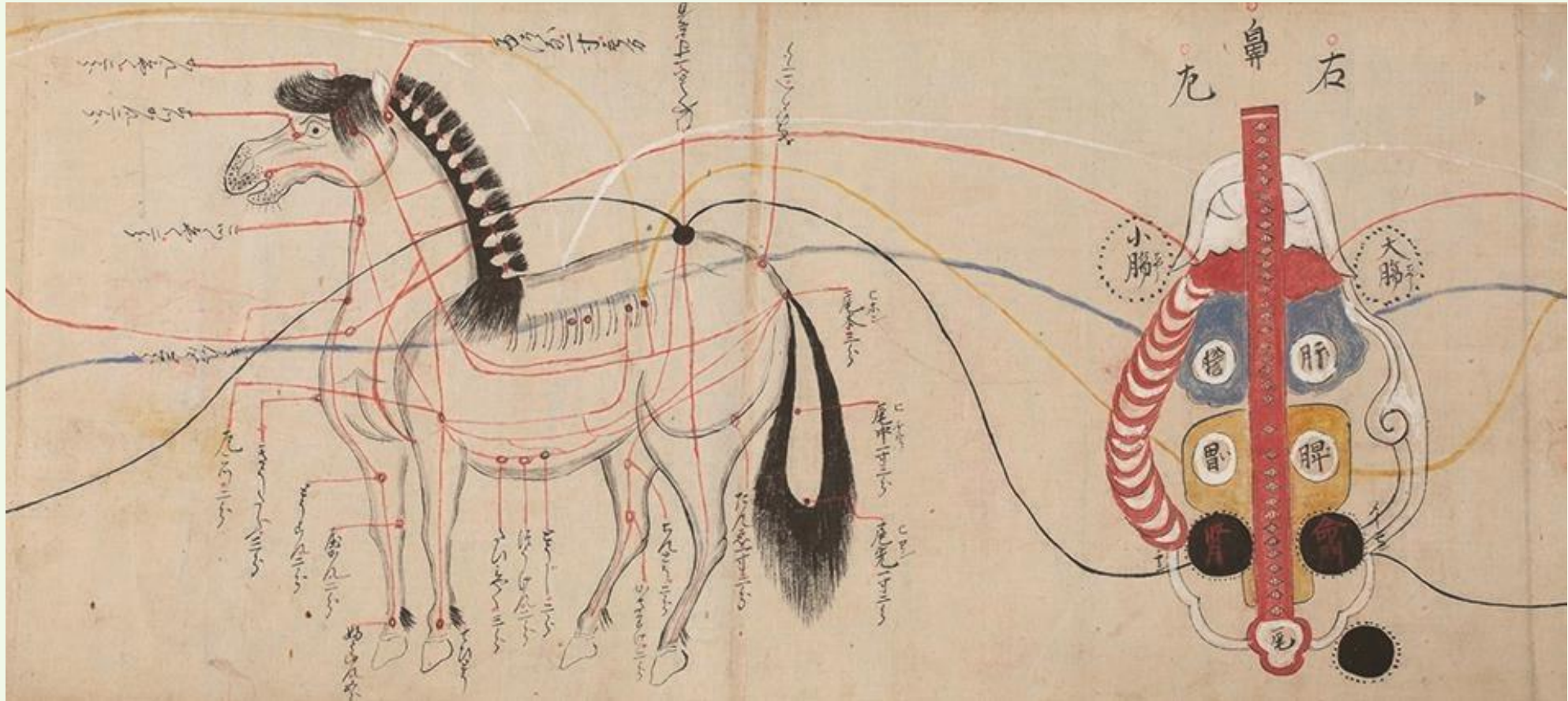
60×100 [cm]



分類別蔵書目録

No.15 安西流馬医巻物 / 安西播磨守 (あんざいりゅうばいまくもの / あんざいはりまのかみ)

1710 (永宝7) 年 農学部図書館 蔵

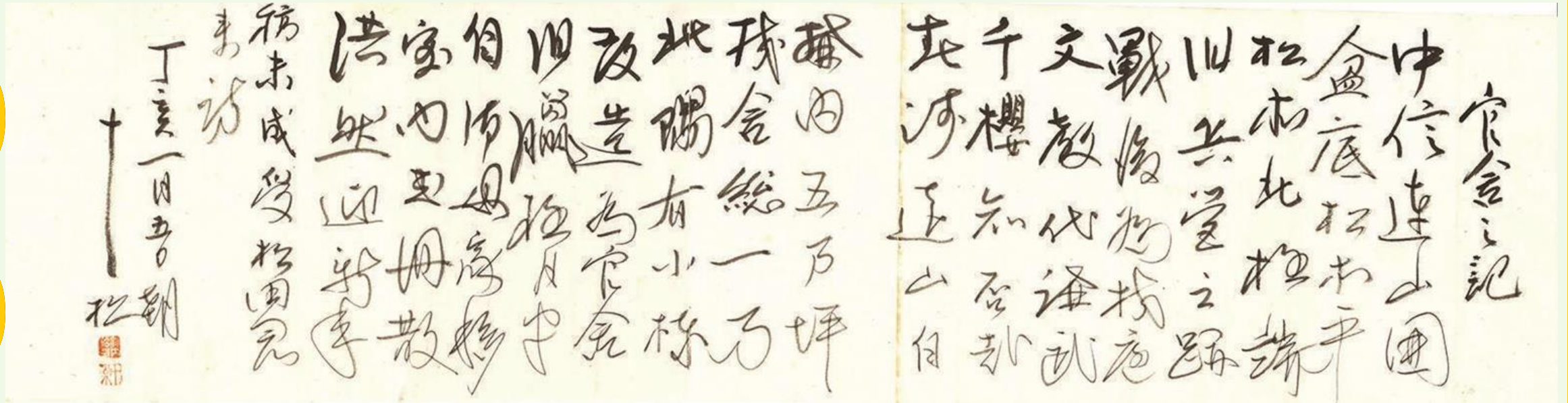


27×598 [cm]

仏教と陰陽五行説を基本思想とした馬医学に通じた故実家の安西播磨守によって書されたものの写本
入門者のために、馬体解剖図、季節による馬の病気、針治療法、馬医学修得の心構えなどが記されている。
1974 (昭和49) 年、駒ヶ根市の笹古家から信州大学農学部へ寄贈された。

No.16 官舎之記 竹内松次郎

1947（昭和22）年1月5日 医学部図書館 蔵



19.3×74.4 [cm]



竹内 松次郎（1884-1977）
雅号：十松（じゅうまつ）

信州大学の設立に尽力し、初代医学部長をつとめた竹内松次郎（雅号：十松）直筆の書

医学部の前身である松本医学専門学校の初代校長として招かれ、構内に存在した官舎（校長宿舎）へ入居に際して詠んだ漢詩

旧陸軍歩兵第五十連隊の駐屯地であった頃より有名な桜の様子とともに、無事に入居の済んだ安堵感を詠んでいる。

No.17

『浅流：歌集』

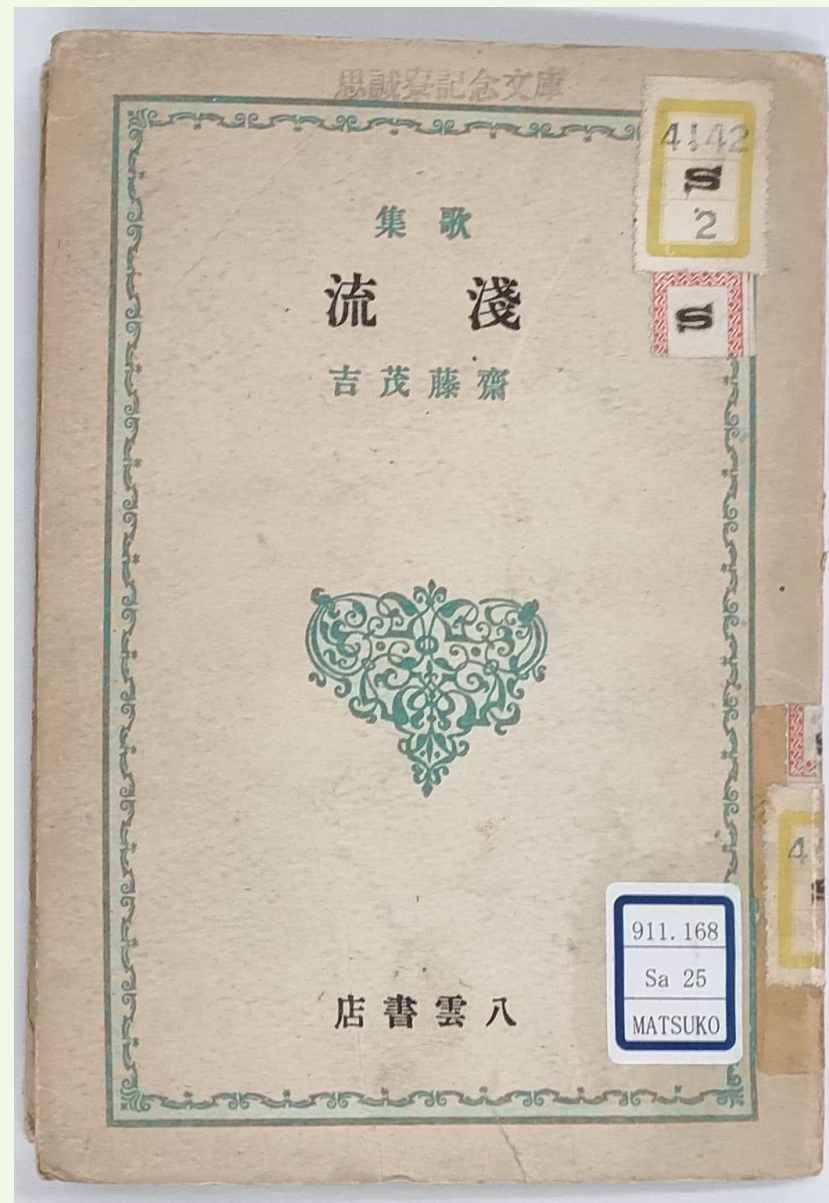
斎藤茂吉 著・八雲書店

1946（昭和21）年
中央図書館 蔵

旧制松本高等学校蔵書

図書の見返しに「思誠寮文庫」の印が押されており、
ペンで「先輩斎藤宗吉兄寄贈図書」と記されているこ
とから、旧制松本高等学校の学生寮「思誠寮」の中に
あった図書室に、旧制松本高等学校の卒業生で作家の
北杜夫（本名：斎藤宗吉）が寄贈したものであること
が分かる。

北杜夫は斎藤茂吉の次男



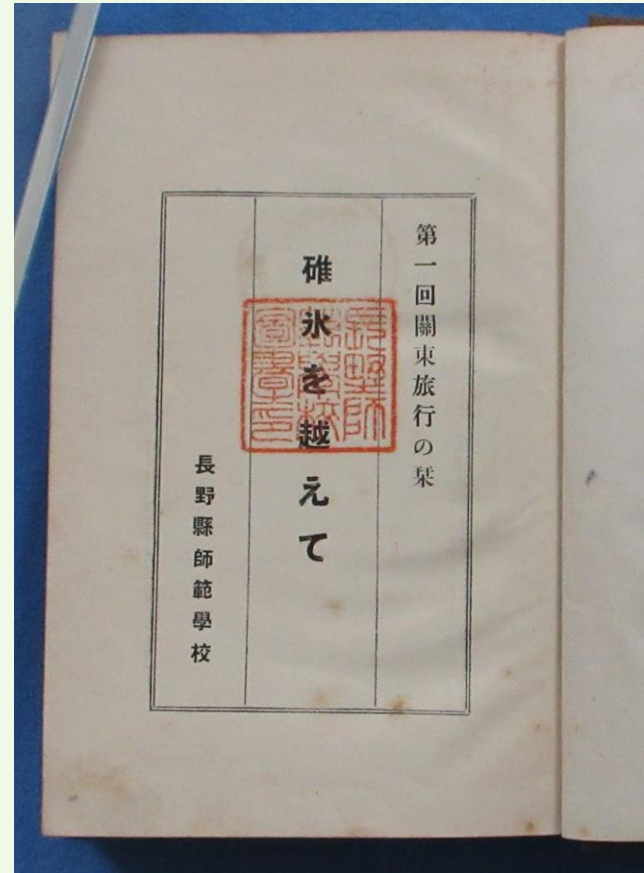
No.18

『碓氷を越えて：第一回關東旅行の栞』

長野縣師範學校内第一回關東旅行委員編集・発行

1930（昭和5）年3月
教育学部図書館 蔵

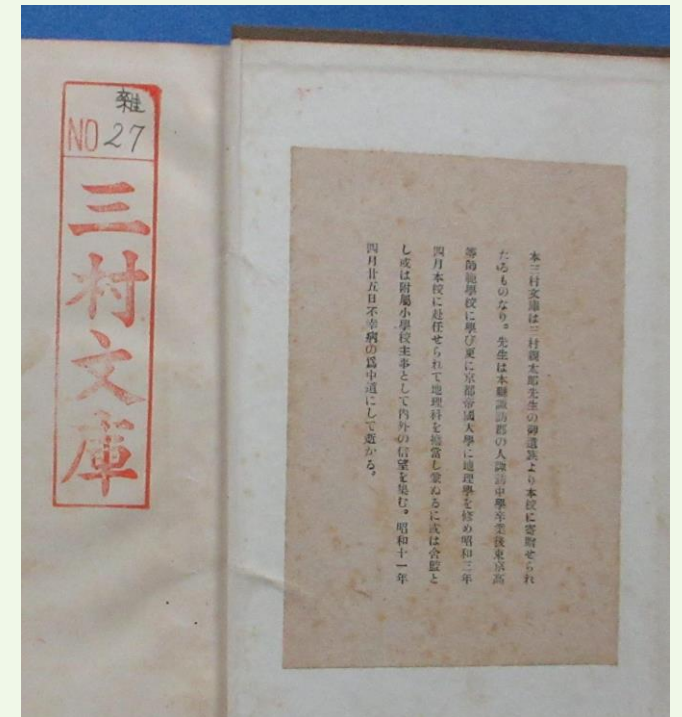
当時の学生たちによって関東旅行に際して作られたしおり。長野から東京までの道中の歴史・地理・文学・風俗の他、関東大震災についてまとめられている。標題紙裏に長野師範学校男子部の蔵書印、遊び紙に「三村文庫」の印、表見返しに三村文庫の由縁あり。教育学部赤煉瓦書庫内で保管されていた資料のひとつ



標題紙



標題紙裏



遊び紙・表見返し

No.19

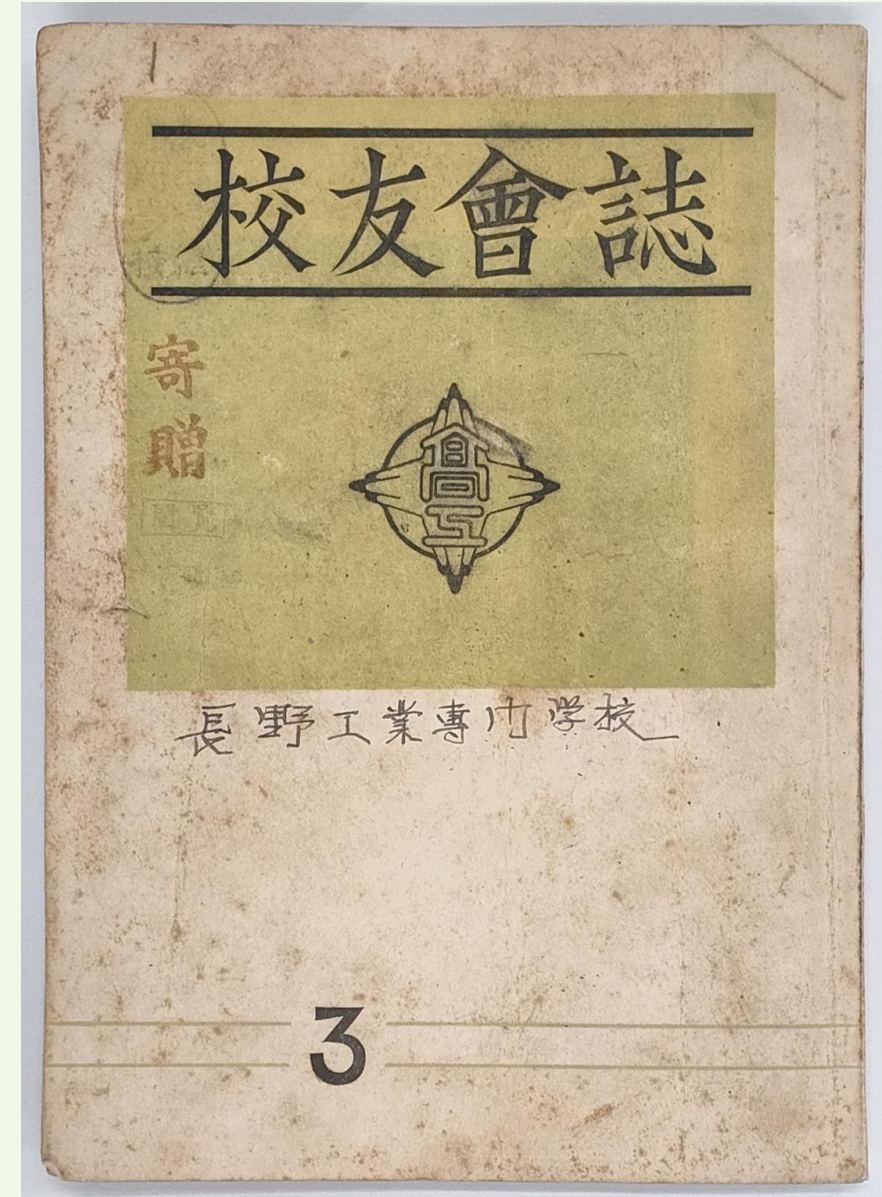
『校友會誌 第3號』

長野工專文藝班編輯

1947（昭和22）年12月15日

繊維学部図書館 蔵

信州大学工学部の前身校である長野工業専門学校
の校友会誌。評論、詩歌、研究成果、科報と
称した学科ごとの雑記、寮報、委員会・部活動
の報告が掲載されている。編輯後記によると第1
號は前年（1946年）に刊行、第3號から判型が
A5判に変更となった。



21×15 [cm]

No.20

『信州大学医学部二十五年史』

信州大学医学部25周年記念会

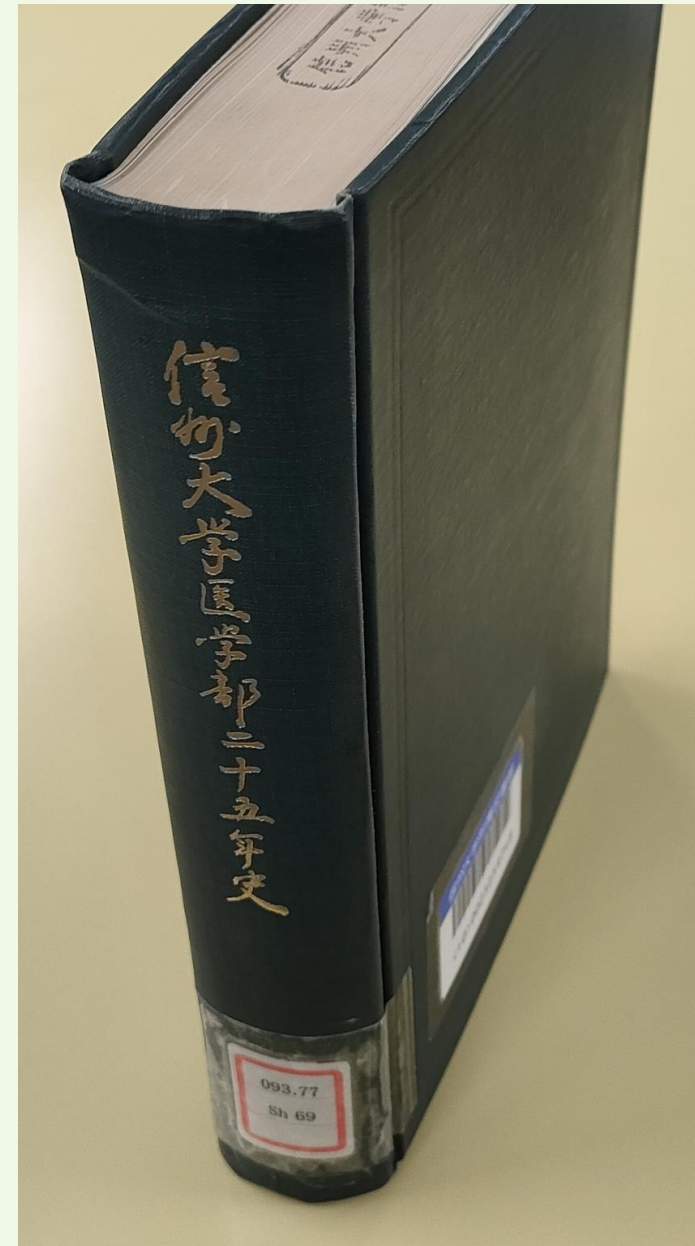
1969（昭和44）年5月10日

医学部図書館 蔵

信州大学医学部25周年に際し編纂された記念誌

松本医学専門学校創設前からの医学部全体の沿革だけでなく、発行当時に存在する教室ごとの沿革についても詳細に書かれている。

巻頭には当時の写真や建物図面が掲載されており、現在の信州大学の正門の場所とは異なる医学部の正門がカラー写真で納められている。



21×15 [cm]

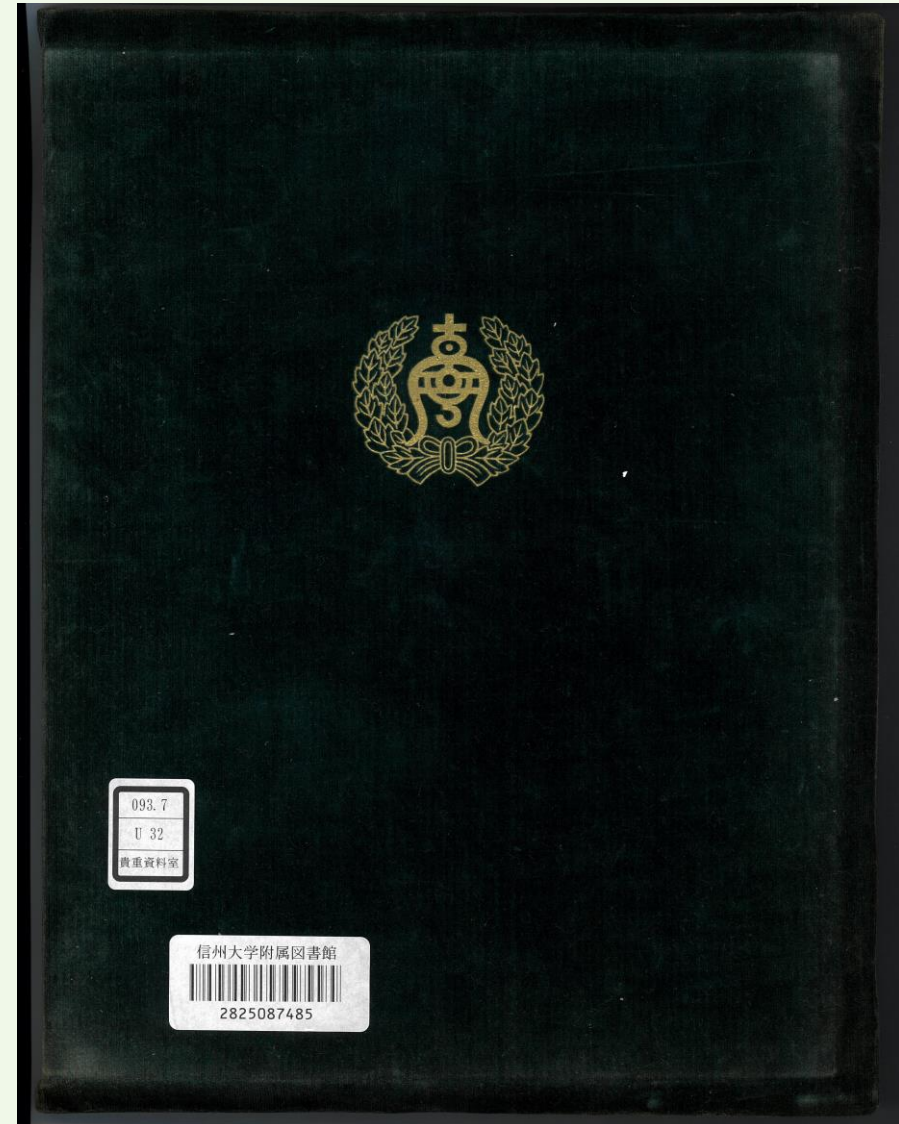
No.21

上田蚕糸専門学校 創立二十五周年祝賀記念帖 (表紙)

製作年不明
繊維学部図書館 蔵

信州大学繊維学部の前身校である上田蚕糸専門学校の創立25周年祝賀会の写真をまとめたアルバム

表紙に箔押しされているのは、同校の校章



29×22 [cm]

上田蚕糸専門学校 創立二十五周年祝賀記念帖

製作年不明
繊維学部図書館 蔵

初代の針塚校長像の除幕式や、旧千曲会館の完成当時の様子もおさめられている。

郵便局や商工会の校内出張、駅前や市の公会堂での催しなど、上田の街をあげての祝賀ムードが伝わる。



信州「知の森」の文化資産『凜』 信州大学の文化財

発行日 2013(平成25)年3月29日
発行 国立大学法人 信州大学

本学に受け継がれる貴重な文化資産を後世に伝えていくためにつくられた冊子である。タイトル「凜」の書は、川村龍洲による信州大学医学部50年史及び写真集『四季の舞・追憶の詩』刊行にあたり揮毫された作品で、本書の中でも紹介されている。
本企画展で展示した資料のほか、全83点の資料を掲載している。



掲載文化財一覧

建造物

旧上田蚕糸専門学校講堂	P 4
● 旧上田蚕糸専門学校貯蔵庫	P 6
旧上田蚕糸専門学校門衛詰所	P 7
● 旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫	P 8
旧長野県庁書籍庫	P 9
旧上高地孵化場物置・飼育池	P 10

絵画・彫刻

よみがえる名画	
旧制松本高等学校の遺産	
信濃の春	P 13
登山口四ツ谷	P 14
● 晩秋、野尻湖畔	P 15
● 雪の蔵訪湖の景	P 16
山辺	P 16
駒の津	P 17
ローマの風景	P 18
伊豆山の風景	P 19
雨	P 19
春雨の潮来	P 19
花畑と花	P 19
風景	P 20
五月雨の朝	P 20
バラ	P 20
スイトピー	P 20
インドの村落カルカッタ郊外	P 21
印度教徒の沐浴場	P 21
湖畔	P 21
秋色	P 21

石井鶴三 遺品3万点

猫(ブロンズ像・石膏像・スケッチ)	P 23
母古稀像	P 24
上田蚕糸専門学校初代校長胸像	P 25
青葉織り	P 26
宮本武蔵(吉川英治)挿絵(別編)	P 27
裸女習作	P 28
デッサン	P 29
相模	P 29

絵画・彫刻

抗夫	P 30
桜島	P 31
作品	P 32
上高地	P 33
ブルガリアの古い町	P 34

書跡

信濃国	P 36
讀書増意氣	P 37
奉迎歌	P 37
四海八荒春	P 38
桃花源詩	P 38
專精學	P 39
人生貴適意	P 40
神怡心靜	P 41
飛龍在天	P 42
徳感人風動物	P 43
龍飛鳳舞	P 43
導き	P 44
居歌	P 44
温故知新	P 45
飯盛山懐古の詩	P 45
凜	P 46

典籍・古文書

藩校文庫	P 48
[多湖文書]信府松本十景句集	P 49
[多湖文書]太子開城記	P 49
長野県師範学校の蔵書	P 50

小谷コレクション

インドおよび高地アジア地図書	P 52
秋山虎行	P 53
日本アルプスの登山と探検	P 54
名山図譜	P 55
富嶽百景	P 56
富士山図	P 57
メルカトル地図	P 57

ダーウインの書

「種の起源」第6版	P 58
「人間の進化と性淘汰」初版	P 58

馬医書

● 安西流馬医巻物	P 59
飯名安藏集(全12巻)	P 59

北 杜夫直筆遺稿	P 60
----------	------

歴史を語る品々

上田蚕糸専門学校の貴重資料	
東帯	P 62
● 織物見本帳	P 62
● 掛け図	P 63
● 生糸商標鑑帖	P 63
ガラス乾板	P 63

信州大学自然科学館

● ライチョウ剥製	P 64
● シンシュウソウ(ミエソウ)	P 64
ダイカイギョウ	P 64
信州大学植物標本庫(SHIN)	P 65
● 有機色素標本	P 65

日本一、約500品種の薬	P 66
● 旧思誠寮瓦	P 67
開学記念寫真集	P 68



● 本企画展で紹介・展示した資料

信州「知の森」の文化資産：凜：信州大学の文化財
信州大学 附属図書館OPAC

繊維学部資料館 真綿・蚕糸館





繊維学部資料館、真綿・蚕糸館

(旧上田蚕糸専門学校貯蔵庫)

繊維学部資料館は、繊維学部的前身校である上田蚕糸専門学校の開校時に繭の保管庫として建築された建物です。上田蚕糸専門学校の開校から100周年にあたる2010(平成22)年に資料館としてリニューアルされ、現在も活用されています。煉瓦造の2階建て、屋根は寄棟造の瓦葺で、意匠が施された建物でもあり、繊維学部に残る最も古い建物です。2013(平成25)年に国登録有形文化財に登録されました。

上田蚕糸専門学校時代の教材類から、養蚕にまつわる歴史的に貴重な資料が展示され、繊維学部のルーツを間近に見ることができます。

真綿・蚕糸館は、繊維学部と包括連携協定を結ぶ一般財団法人日本真綿協会から「真綿と蚕糸関係の恒久的展示施設の設置を」との申し出を受けて寄贈された施設で、2021(令和3)年6月に完成しました。工学部建築学科の教授が設計を手掛けたこだわりの詰まった建物でもあります。

館内には、繭や真綿を使ったアート作品などを展示し、講習室では真綿作り体験などを行うなど、学部内の学生・教職員はもとより、国内外からの学生たちが学ぶ場所として利用されています。

いずれも、事前に連絡をして見学することができます。

繊維学部デジタルアーカイブ：<http://fiber1.shinshu-u.ac.jp/tex-da/>

真綿・蚕糸館(上田キャンパス)：<https://x.gd/RfMH1> (信大 facebook)

繊維学部デジタルアーカイブ：<https://www.instagram.com/reel/DJ1L-p6sa4y/?hl=ja> (信大 Instagram)

(参考)文化遺産オンライン Webサイト：<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/258912>



繊維学部資料館



真綿・蚕糸館

No.22 蚕の繭の標本(1)

明治～大正年間
繊維学部資料館 蔵

上田蚕糸専門学校で育てた繭の標本
採取した年や蚕の種類が記されており、
繭の大きさや色・形の違いを比較できる。



(参考展示資料：
現在の飼育実習で採取された繭)



34.0 × 44.5 × 6.0 [cm]

No.23

蚕の繭の標本(2)

「桑の品種ト掃立時期」

制作年不明

繊維学部資料館 蔵

蚕の品種、与えた桑の品種、掃き立て時期ごとに繭を並べた標本

桑の品種や掃き立て時期の差により生じる繭の大きさや形の違いがわかる。

掃き立て

4～5月頃、卵からかえった蚕を蚕紙(さんし)から蚕座(さんざ)などへ移し、餌を与えること。

孵化したばかりの小さな蚕を潰さぬよう、

刷毛状の道具を用いて行う。



40.0 × 49.0 × 4.0 [cm]



資料館内の展示の様子

(上) 蚕模型と輸出用生糸

(右) 掛図写真ほか



「掛け図 PRODUCTS OF THE SILKWORM AND MULBERRY」

The Ueda Imperial College of Sericulture and Silk Industry. Ueda, Japan.

制作年代 不明
繊維学部資料館 蔵

上田蚕糸専門学校で使われた教材のひとつ。枠外下部の「Ueda Imperial College」の表記から、特注品として作られたことがうかがえる。他にも、蚕の解剖図や桑の病を説明する掛け図が現存する。



125 × 80 [cm]



上田蚕糸専門学校の授業風景

上田蚕糸専門学校時代
繊維学部 蔵



生糸商標彙帖

明治～大正時代
繊維学部資料館 蔵

上田蚕糸専門学校製糸科2回生が、全国の製糸会社から集めて学校に寄贈した841枚の商標で、大正2年（1913年）の開校記念式典で展示された。

当時、生糸は日本の重要な輸出産業でした。商標には、外国人から見てエキゾチックな日本的デザインやローマ字、英語・フランス語も使われている。また、地域名に「信濃」など旧国名が多く、当時の人々の「国」の意識もうかがえる。

写真の資料は、上田市の常田館などの商標（常田館は、現在の笠原工業の前身の企業）



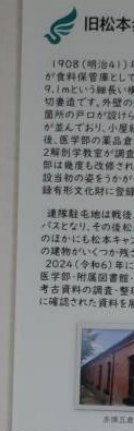
商標付き生糸

上田蚕糸専門学校時代
繊維学部資料館 蔵

輸出用の生糸は、このような形で商標を付けて出荷された。実物は繊維学部資料館にて展示している。



旧松本歩兵第五十連隊 糧秣庫



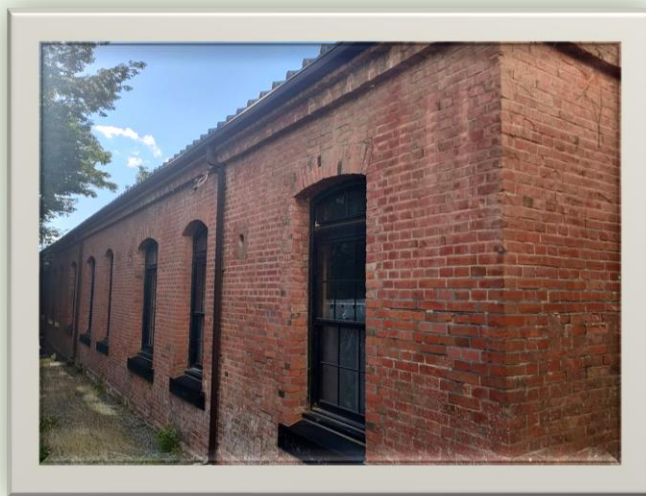


旧松本歩兵第五十連隊 糧秣庫 (医学部 資料室)

1908(明治41)年から松本に駐屯した陸軍歩兵第五十連隊の食料保管庫として使用されました。建物は、桁行36.3m、梁間9.1mという細長い構造をしており、煉瓦造の平屋建て、棧瓦葺の切妻造です。外壁の煉瓦はイギリス積で、北面に3箇所、西面に1箇所の戸口が設けられています。壁には半円形のアーチを持つ窓が並んでおり、小屋組はキングポストラス構造という造りです。戦後、医学部の薬品倉庫や研究室、資料室として使われ、医学部第2解剖学教室が調査した考古資料なども保管されていました。内部は幾度も改修されていますが、外部の改修は少なく、現在も建設当初の姿をうかがうことができ、2012(平成24)年8月に国登録有形文化財に登録されました。

連隊駐屯地は戦後、1946(昭和21)年7月、松本医学専門学校のキャンパスとなり、その後松本医科大学、信州大学が引き継ぎました。このほかにも松本キャンパスには、五十連隊に由来するレンガ造りの建物がいくつか残されています。

2022(令和4)年から、長野県埋蔵文化財センターの協力のもと、医学部・附属図書館・大学史資料センターにより、保管されていた考古資料の調査・整理が行われています。今回は、この調査で新たに確認された資料を展示しています。



赤煉瓦倉庫 (通称)

Webサイト: <https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/introduction/post-23.html>

関連イベント資料

長野県埋蔵文化財センター地域展 掘るしんin信州大学 『赤レンガ倉庫の考古資料』

2024(令和6)年には、2022(令和4)年から行われてきた調査成果の展示会と高橋龍三氏(早稲田大学名誉教授)による講演会が信州大学中央図書館で開催された。

展示や講演会には多くの参加者が訪れ、信州大学医学部の教授らが考古学研究に関わってきた歴史に触れ、大切に保管されてきた資料を興味深く見る姿があった。

調査研究は、10年計画で続けられているため、今後、あらたな発見も期待される。



長野県埋蔵文化財センター地域展

掘るしんin信州大学



旧松本歩兵五十連隊 糧秣庫 (埋蔵文化財センター医学部資料室)

赤レンガ倉庫の考古資料

展示会 信州大学の収蔵遺物と当時の調査成果をパネルで解説

令和6年 9/13(金) ~ 10/16(水)

会場 ▶ 信州大学中央図書館(松本キャンパス)

〒390-8621 松本市旭 3-1-1 TEL 0263-37-2172

開館時間は日によって変わります。
信州大学中央図書館HPにてご確認ください。



講演会

令和6年 9/17(火) 14:30 ~ 16:00 (受付14:00)

会場 ▶ 信州大学中央図書館(松本キャンパス) セミナー室

『信州大学の調査研究と日本の考古学』

講師 高橋龍三郎氏(早稲田大学名誉教授)



縄文時代



縄文時代



縄文時代



縄文時代

展示会、講演会ともに申し込み
不要、参加費無料です。



駐車場がないため
公共交通機関を
ご利用ください。



問い合わせ先

一般財団法人 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
TEL(026)293-5926 maibun@naganobunka.or.jp
FAX(026)293-8157 https://naganomaibun.or.jp



主催 信州大学 医学部・附属図書館・大学史資料センター
一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

後援 長野県

報告書:

「信州大学医学部等所蔵考古資料目録」
長野県埋蔵文化財センター
発掘調査報告書 137 2026.3
(信州大学 附属図書館OPAC)

No.24

尖頭器

(塩尻市内出土)

旧石器時代 (約20,000～15,000年前)
医学部赤レンガ倉庫 蔵

塩尻市池ノ入で1957 (昭和32) 年に採集された黒曜石製の尖頭器である。『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第2巻』 (1973年、東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会) ・『塩尻市誌第2巻』 (1995年、塩尻市誌編纂委員会) に掲載されている。基部の丸い平面形と、D字状の断面形から旧石器時代末から縄文時代草創期と考えられる。付属の荷札の「32.8 縣陵 風研」の記載は昭和32年に松本県ヶ丘高校風土研究部による採集であったことを物語る。赤レンガ倉庫の考古資料の多くは、1950年代から60年代の医学部第2解剖学教室の鈴木誠教授とそのもとで研究した西沢寿晃技官、さらには同教室に集った藤沢宗平・小松虔両氏らの地域の考古学研究者の活動によっている。



6.0 × 2.8 [cm]

No.25

歯牙垂飾

(佐久市月明沢岩陰遺跡出土)

弥生時代前期末から中期初頭(約2,350年前)
医学部赤レンガ倉庫 蔵

月明沢岩陰遺跡は、佐久盆地西縁のハヶ岳連山のひとつ、蓼科山地に連なる台地端の断崖に位置する。以前から人骨が採集されており、信州大学医学部の鈴木誠教授に出土骨の鑑定が依頼されていたが、これらに伴って送られた土器の中に、弥生時代前期相当の土器が含まれていることを西沢寿晃技官、松本市立博物館の小松虔学芸員が確認し、1971年に調査が行われた。この調査では土器・人骨のほかに人の奥歯(上顎右第3大臼歯)に穴をあけた本資料が出土した。縄文時代晩期から弥生時代前期の身体加工風習の一つとして、注目された。



No.26

土偶（頭部）

（波多村（現松本市波田）出土）

縄文時代中期（約5,000年前）
附属図書館（中央図書館） 蔵

頭部のみで胴部以下は欠損する。顔面はやや上を向き、短い沈線または削込みにより眼と口を、粘土粒を貼付し鼻を表現する。裏面の剥離痕跡は、髪型表現の可能性もある。波多村（のち波田町、現松本市波田）下原から出土したとされ、縄文時代中期の可能性はあるが、共伴遺物などは不明である。採集時期は明治期にさかのぼる可能性がある。

人類学者・考古学者の鳥居龍蔵（1870-1953）が信濃教育会諏訪部会の委託を受けて編纂した『諏訪史』（1924年）に掲載されていて、大正期にはその存在を知られていた。



5.0 × 4.0 [cm]

No.27

土偶(胴下半部)

(波多村(現松本市波田)出土)

縄文時代後期(約4,000年前)
附属図書館(中央図書館) 蔵

胴下部から脚部が残る中実土偶。胴部の反りからみて、三角状の文様と縦方向の沈線を描く面が腹部であろう。背は渦巻状などの文様を描き、足裏には網代圧痕がみられる。

本資料は波多村(のち波田町、現松本市波田)新田から出土したとされ、やはり『諏訪史』(1924年)に掲載されている。出土時期は明治期にさかのぼる可能性がある。縄文時代後晩期の可能性があるが、共伴遺物などは不明。



15.0×12.5 [cm]



信州大学の誕生

1948年秋から冬にかけて、開学の準備が進められた。学生の募集に「信州大学」の学志願者に届けられた。1949年5月31日、国立学校設置法が公布・施行。5月1日とした。

大学設置認可申請書
(私立信州大学)
1948(昭和23)年5月
大学全資料センター蔵

長野県立信州専門学校(現信州大学)の前身として、長野県立信州専門学校が設立した。信州大学は、長野県立信州専門学校を前身として、1948(昭和23)年5月に信州大学として設立された。

信州大学創立準備資料
1948-51(昭和23-26)年
大学全資料センター蔵

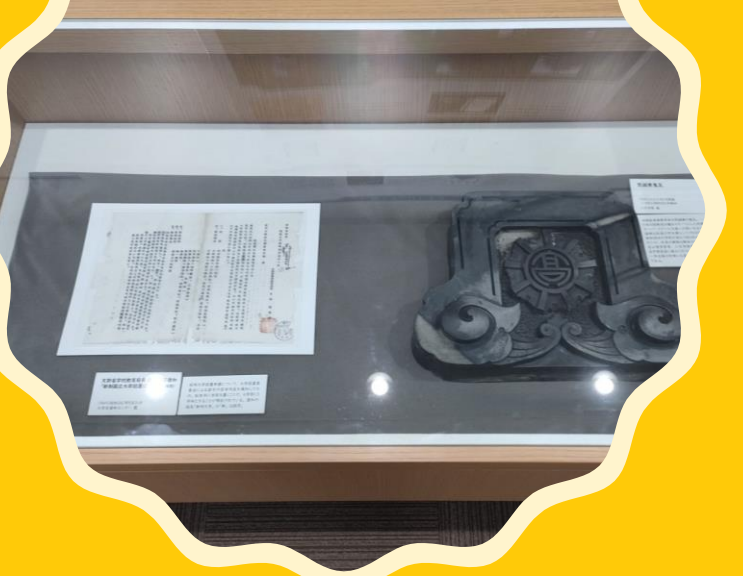
大学設立に関する資料群、11冊が収められている。主眼点に据えられた信州大学を構成するための準備資料(下書き、複製原稿、文書)が豊富に収められている。

昭和二十三年
信州大学入学試験要項
1948(昭和23)年度 教育庁蔵
信州大学創立入学試験に関する要項要綱。

各キャンパスの植栽

1948(昭和23)年、信州大学は、長野県立信州専門学校を前身として、1948(昭和23)年5月に信州大学として設立された。信州大学は、長野県立信州専門学校を前身として、1948(昭和23)年5月に信州大学として設立された。

信州大学は、長野県立信州専門学校を前身として、1948(昭和23)年5月に信州大学として設立された。信州大学は、長野県立信州専門学校を前身として、1948(昭和23)年5月に信州大学として設立された。



本部・学部

No.28

思誠寮鬼瓦

1920(大正9)年9月開寮
～1983(昭和58)年解体

人文学部 蔵

旧制松本高等学校の思誠寮の鬼瓦。9本の放射状の線をモチーフにした校章は、ナンバースクール九高への思いを示す。

思誠寮は松高の学生寮として1920年開寮。新制信州大学移行後も1983年まで使用されたが、木造の建物は解体された。

この鬼瓦は、理学部、人文学部に継承され、各学部長室に展示されている。中央部分は一見松高の校章にも見えるが、異なるものである。



31×44×13 [cm]

▶3D画像を見る

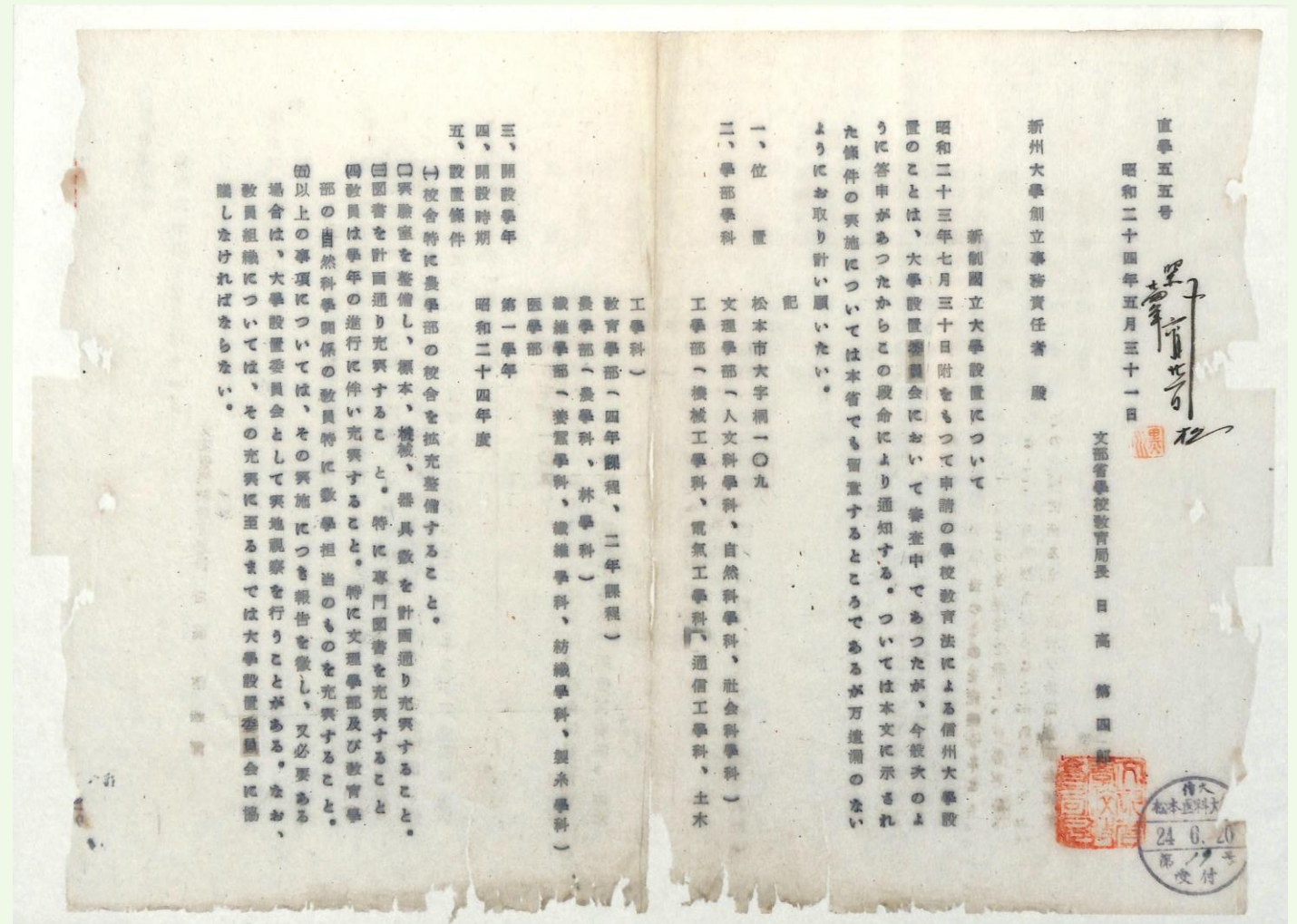
3Dモデル作成：DX推進センター 小林美緒 准教授

文部省学校教育局長 開学認可通知 「新制国立大学設置について」(複製)

1949(昭和24)年5月31日

大学史資料センター 蔵

信州大学設置申請について、大学設置委員会による認可の答申内容を通知したもの。松本市に本部を置くことや、6学部13学科とすることが明記されている。通知の宛先「新州大学」の「新」は誤字。



No.30

思誠寮日誌

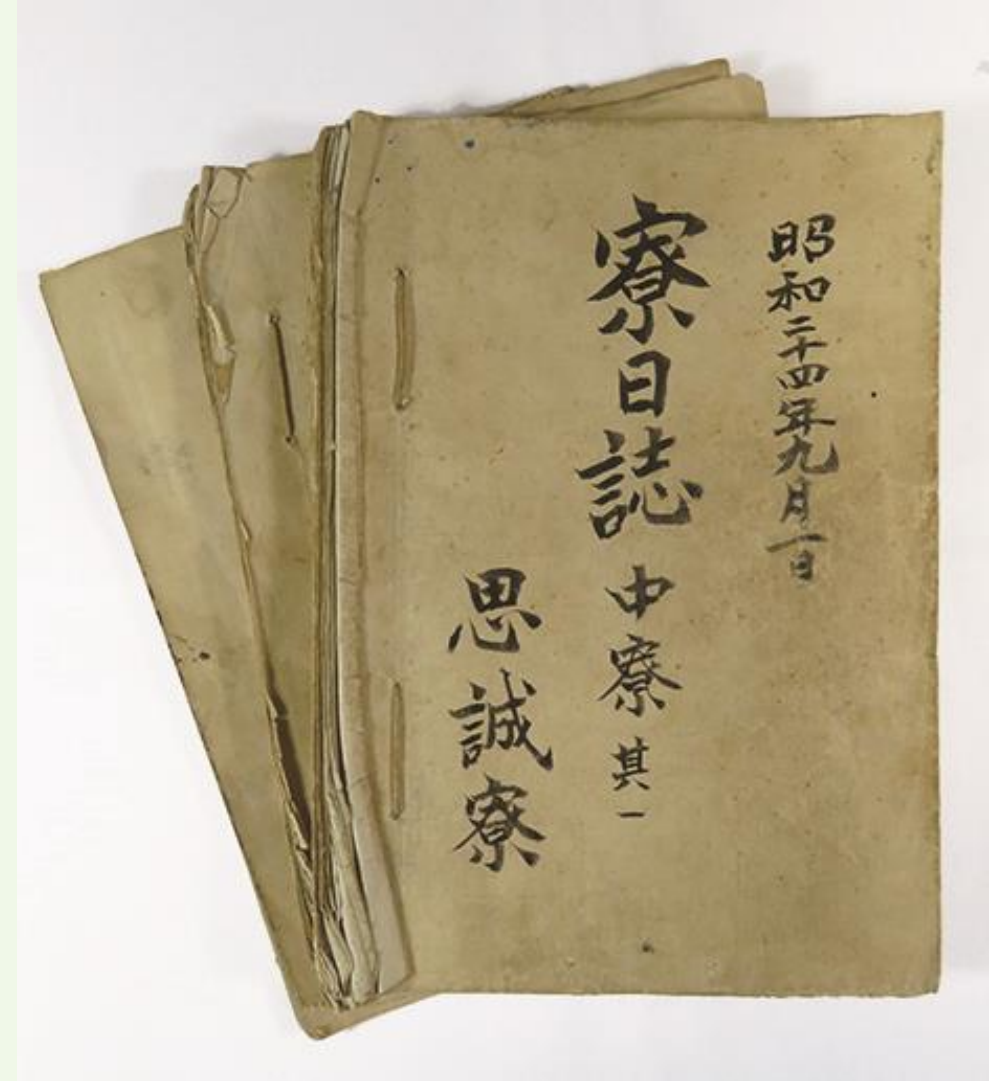
1949(昭和24)年

1950(昭和25)年

人文学部 蔵

旧制松本高等学校から信州大学へと引き継がれた「思誠寮」に暮らした学生たちが、日々書き綴った日誌。

巻頭には、「寮記録ニシテ寮史編纂ノ資トナルカラ昭和icher(独語:確かな)ニ願ヒマス」と、寮史の編纂を見据え、正確な情報を記すように促す注意書きがみられる。



諸収入金回議簿

1948(昭和23)年10月
1949(昭和24)年4月
1950(昭和25)年度
財団法人民生科学研究所
工学部 蔵

長野工業専門学校は、戦後の混乱や1946（昭和21）年の校舎焼失により、学校の存続が危ぶまれたが、学生や支援者等の熱意による県下各方面から得た寄付金をもとに、学校の設備を充足していった。

1947(昭和22)年10月、財団法人民生科学研究所を設置し、さらなる設備拡充費用と学生の学費の一助とするため、学校の設備を活用して独自事業の展開を図った。産学協業の先駆けともいえる事業であったが、長野工業専門学校の閉校によりその幕を下ろした。



企業からの受注代金帳簿である。信濃毎日新聞社からは、印刷機部品のゴムローラー、岡谷組からは土木工事用資材である土管覆い、柳原製作所からは歯切り、ギヤー等の各種機械部品といった製品、このほかにも石炭の分析など様々な分野から受注していることがわかる。

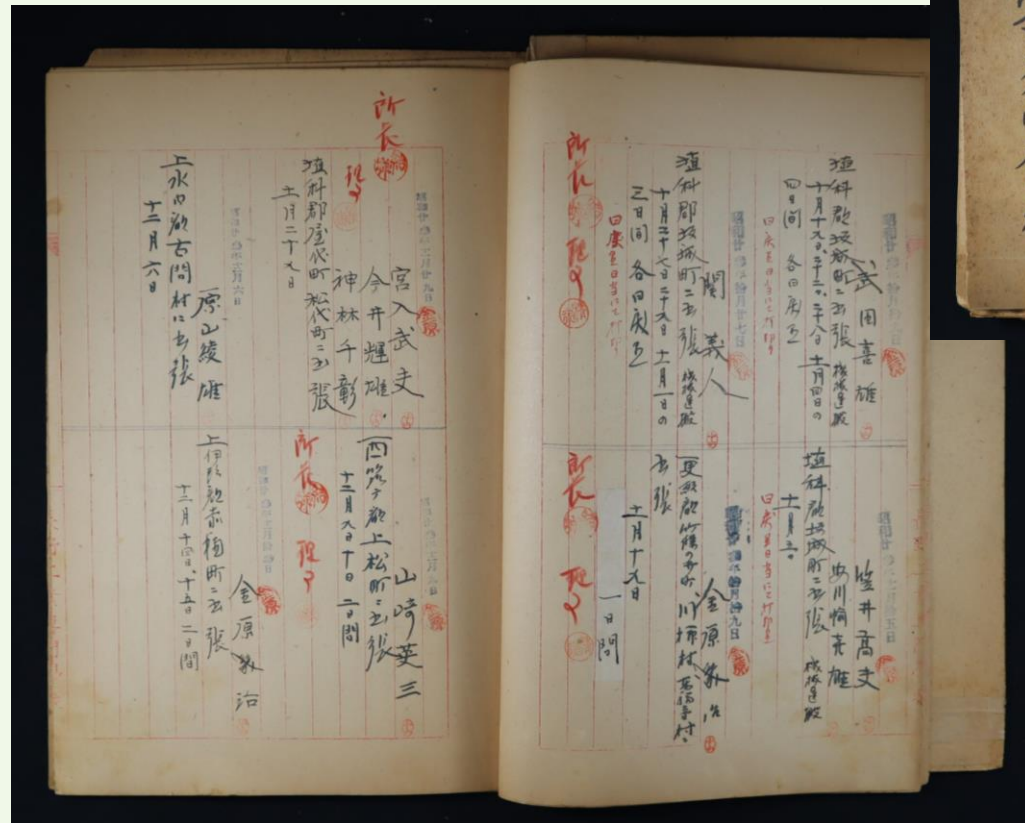
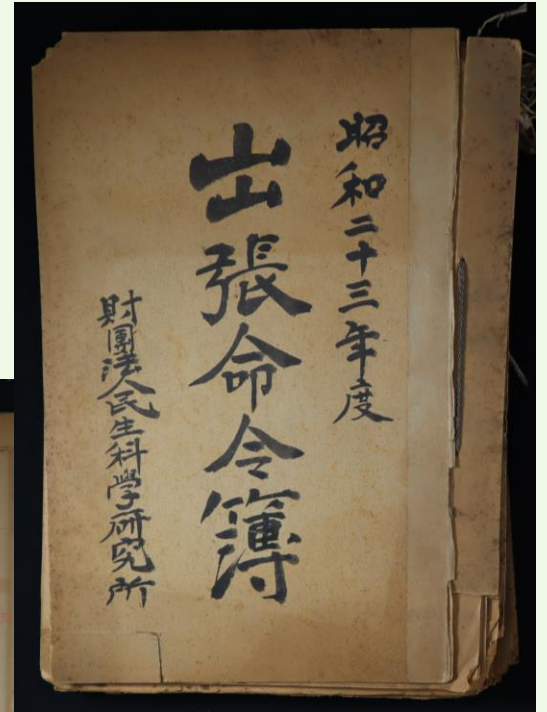
日期	品名	数量	单价	金额	用途	备注
26.1.10	A466 3400	1	600.00	600.00	111111111111111111	长明寺
	A476 75-1 竹席	1	100.00	100.00	111111111111111111	长明寺
	A481 木板新	5000	600.00	3000.00	111111111111111111	长明寺
	A481 熟石灰	5000	125.00	625.00	111111111111111111	长明寺
	A487 425 熟石灰	1			111111111111111111	长明寺
	A466 3400	1	2000.00	2000.00	111111111111111111	长明寺
	A464 土管 覆	1	750.00	750.00	111111111111111111	长明寺
	A473 铁板		600.00	600.00	111111111111111111	长明寺
	A477 铁板		4600.00	4600.00	111111111111111111	长明寺
	A477 铁板		544.00	544.00	111111111111111111	长明寺
	A466 3400		790.00	790.00	111111111111111111	长明寺
	A477 铁板		350.00	350.00	111111111111111111	长明寺

No.32

出張命令簿

1948(昭和23)年度
財団法人民生科学研究所
工学部 蔵

教員自らが、埴科郡坂城町(各種機械工業)、上水内郡古間村:現信濃町(打刃物産業)、上伊那郡赤穂町:現駒ヶ根市(ネジ等精密部品工業)など、県内外各地に出向き商談をしていることが伺える。



大学史資料センター





大学史資料センター

2019(令和元)年の信州大学創立70周年を契機に、散逸が危惧される前身校からの歴史に関する資料の収集・整理・保存・公開・展示を担う組織として、2017(平成29)年4月に設立されました。

学部及び同窓会・校友会などとの連携により、本学の歴史資料の体系的収集・整理・保存・展示等を行っているほか、デジタルアーカイブズを構築し、大学の歴史を将来に伝承するために活動しています。

これまでに、500名近くの卒業生・教職員等の方から問い合わせがあり、8,500点を超える資料が寄贈されています(2025年9月現在)。このほか、開催した企画展については、展示内容をまとめ、Webサイトに掲載しているので、いつでも閲覧することができます。

設立からの活動をふまえ、「自校史教育の更なる充実」と「信州大学100年史の編纂」を新たな目標にしています。

本学の歴史に関する文書、写真、記念品などの歴史的資料とそれに関する情報の提供は随時受け付けています。常設の展示はないため、今後整備していく予定ですが、事前連絡で寄贈資料を閲覧することはできます。

Webサイト: <https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/>



 大学史資料センター
(松本キャンパス 北西共通棟1階)

各学部的前身校と校章



松本高等学校

現在の学部: 人文・経法・理学部

設立: 1919 (大正8) 年

1918 (大正7) 年の改正高等学校令に基づき、翌年に全国9番目の官立 (国立) 旧制高等学校として設立した。文科・理科よりなる修業年限3年の高等科を設置し、学生寮として思誠寮 (しせいりょう) が建てられた。人文学部・経済学部・理学部の前身校である。旧校舎本館・講堂は重要文化財。

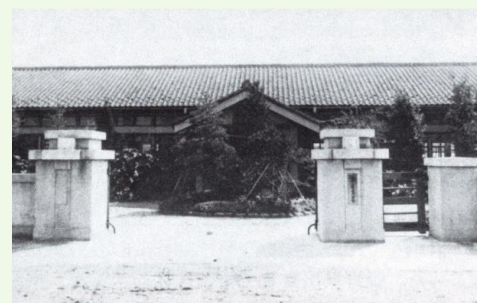
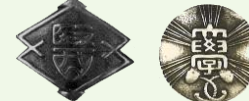


松本医科大学・ 松本医学専門学校

現在の学部: 医学部

設立: 1944 (昭和19) 年

1944 (昭和19) 年、第二次世界大戦下における医師不足を補うため、官立松本医学専門学校が開校し、翌々年に旧陸軍歩兵第五十連隊跡地 (現・松本キャンパス) に移転した。1948 (昭和23) 年には、大学令に戻づく大学 (旧制大学) として官立松本医科大学を設置され、いずれも医学部の母体として、信州大学設置後もしばらく存続した。



長野工業専門学校

現在の学部: 工学部

設立: 1943 (昭和18) 年

1943 (昭和18) 年、戦時下における技術者の養成と工業教育の必要性が高まる中、長野高等工業学校が設置された。翌年、長野工業専門学校に改組し、長野工業試験場 (長野市若里) の建物を校舎とした。戦後の日本再生を担い、最先端技術を研究し未来を牽引する人材を育てる基になっている。



長野県立農林専門学校

現在の学部: 農学部

設立: 1945 (昭和20) 年

1945 (昭和20) 年に設置された長野県立農林専門学校は、高度な農学教育を目的とし、上伊那農業学校 (現・上伊那農業高等学校) に併設されて開校した。全国有数の農業・林業県である長野県に戦時下における専門機関が必要であると考えられていた。現在農学部のある場所に校舎などの施設が整えられて移転したのは1947年である。



上田繊維専門学校

現在の学部: 繊維学部

設立: 1910 (明治43) 年

1910 (明治43) 年に上田蚕糸専門学校が設立、官立初の蚕糸専門学校であった。1944 (昭和19) 年に上田繊維専門学校に改称。元々蚕糸業が盛んな地であったこと、交通の便の良さから上田の地が選ばれた。当時の専門学校は総合大学に対する専科大学の位置付けであった。繊維学部は現在、ファイバー工学の国際的教育研究拠点として認知されている。



長野師範学校

現在の学部: 教育学部

設立: 1873 (明治6) 年

1873 (明治6) 年、小学校教員養成のため、旧長野県と筑摩県に設けられた師範講習所は、翌年、筑摩県師範学校、翌々年長野県師範学校となり、1876年 (明治9)、両県合併にともない長野県師範学校になった。長い歴史の中で多くの教育者を送り出している。



長野青年師範学校

現在の学部: 教育学部

設立: 1918 (大正7) 年

1918 (大正7) 年、小学校を卒業し工業や農業に従事する勤労青年に、職業教育・普通教育・軍事教育を行なうための教員を養成する目的で、長野県実業補習学校教員養成所が設けられた。1944 (昭和19) 年、師範学校教育令の改正で長野青年師範学校になったのち、信州大学が創設されるに伴い、新制大学に包括され教育学部に移行した。



No.33

学生帽

松本高等学校開校50周年記念

1968(昭和43)年

松本高等学校卒業生資料
大学史資料センター 蔵

松本高等学校開校50周年に作られた記念品のひとつで、予約者には事前送付、式典では500円で販売された。ラシャ生地、白線二条、ツバはビニール製、帽章は真鍮である。

帽章(徽章)は、松の小枝の上に9本の放射状の線(9番目のナンバースクールの意)で旭日を表している。学生たちからは地方鉄道の徽章みたいだと不満の声があがり、改正をもとめる騒動が起こった。



19.0×22.3 [cm]

丸帽…ラシャ地 白線二条

ツバ…ビニール

帽章…真鍮

裏 ラベル(学年、組、氏名、番号58, 59)

No.34 学生帽(角帽)

1948(昭和23)年頃

松本医科大卒業生資料
大学史資料センター 蔵

角帽とは、上部が四角形(ひし形)で、ひさしがついた学生帽のこと。1886(明治19)年に帝国大学(現東京大学)で採用されて以来、他の多くの大学でも使われた。



19.0×22.3×10.0 [cm]

角帽…ラシャ地、庇…革、アゴ紐…革
帽章…真鍮“大學”の文字、耳章…真鍮“大”の文字と桜の組合せ

No.35

ベルトバックル

卒業記念品

1945(昭和20)年

長野工業専門学校卒業生資料
大学史資料センター 蔵

工学部の前身である長野工業専門学校の卒業記念品である。校章とN.T.C.
(Nagano.Technical.Collegeの頭文字)を配置している。「高工」の文字は、長野工業専門学校の前身の長野高等工業学校を表していると思われるが、上下左右の4つの突起についての詳細は不明。



3.7×5.5×1.2 [cm]

材質…金属(真鍮)製

意匠…長野工業専門学校校章、N.T.C.

No.36 襟章

1946(昭和21)年

官立長野師範学校女子部卒業生資料
大学史資料センター 蔵

官立長野師範学校女子部は、1943(昭和18)年の師範教育令により、前身である松本女子師範学校から改正された。女子師範の八葉の鏡を模した校章とは異なる桜のモチーフに師の字を配した校章が作られた。



2.0×2.0×0.5 [cm]
地…紺平織 刺繍…金モール

No.37

手ぬぐい

信州大学教育学部 創立九十周年記念

1967(昭和42)年

教育学部卒業生資料
大学史資料センター 蔵

信州大学教育学部の創立九十周年記念に作られた藍染の木綿製手ぬぐい。

左から信州大学、長野師範学校、松本女子師範学校、長野青年師範学校の校章があしらわれている。それぞれ、コマクサ、トガクシショウマ、鏡、桑の葉がモチーフになっている。



30.0×85.0 [cm]

No.38

文理学部の机

制作年不明

大学史資料センター 蔵

文理学部時代にあがたの森の校舎で使用されていた机。理学部に受け継がれ研究室で使われていた。ぐらつくこともなく、頑丈な造りになっている。



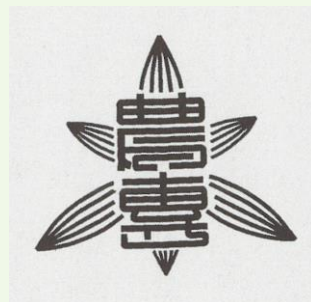
43×61×76 [cm]

参考資料 長野農林専門学校校章

「アルバム」長野農林専門学校

1933(昭和8)年3月

農学部同窓会 蔵
(写真提供)



長野県農林専門学校の校章

<校章について>

作成年:不明

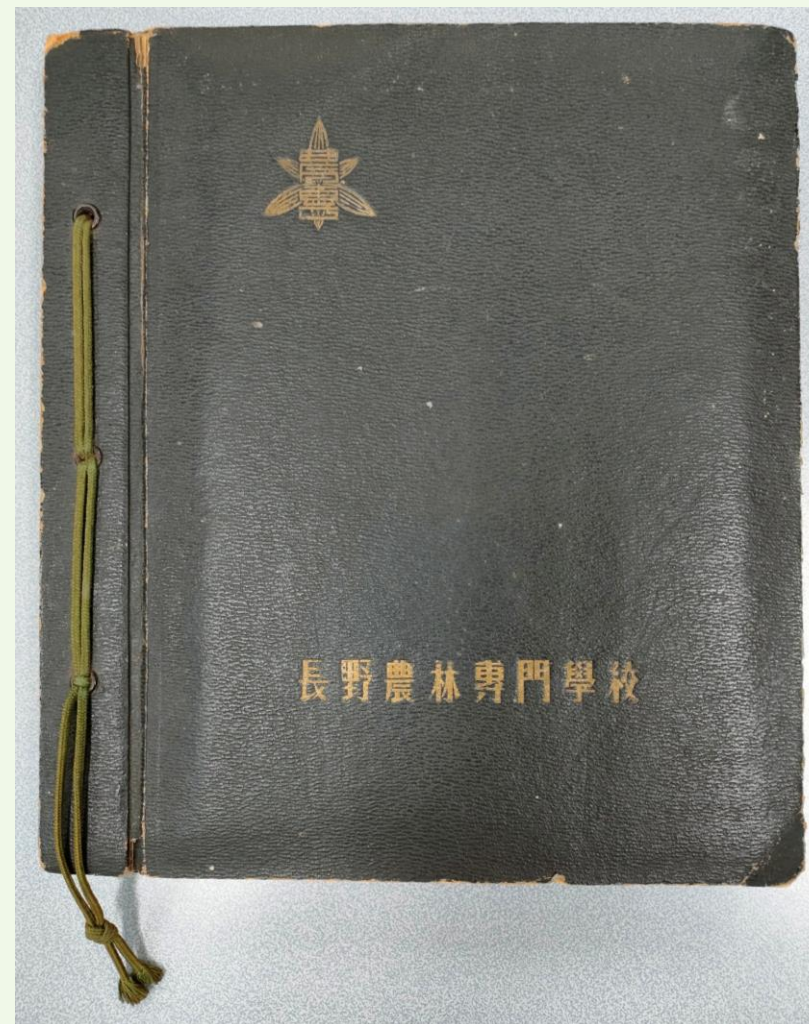
由来:不明

デザイン:中央の文字は“農専”および長野農林専門学校(長野県立農林専門学校 1945-1952年)を表し、植物の葉と組合せている。

意匠の植物はスズタケと推定される。

近代まで万葉集に登場する信州(信濃)の枕詞、「御簀(みすず)刈る」(信濃)はスズタケの別称の「御簀(みすず)」のこととされていた。稗の先に2~3葉が付くため、三簀ともいう。葉を上下に組合せ、長野県全体を示すものと思われる。

(参考)同様のものとしてスズタケ(御簀)をデザインした下伊那農高等業学校の校章がある。(大正10年制定)



27.0×25.0×2.5 [cm]
紐綴じ・黒貼表紙金文字製本

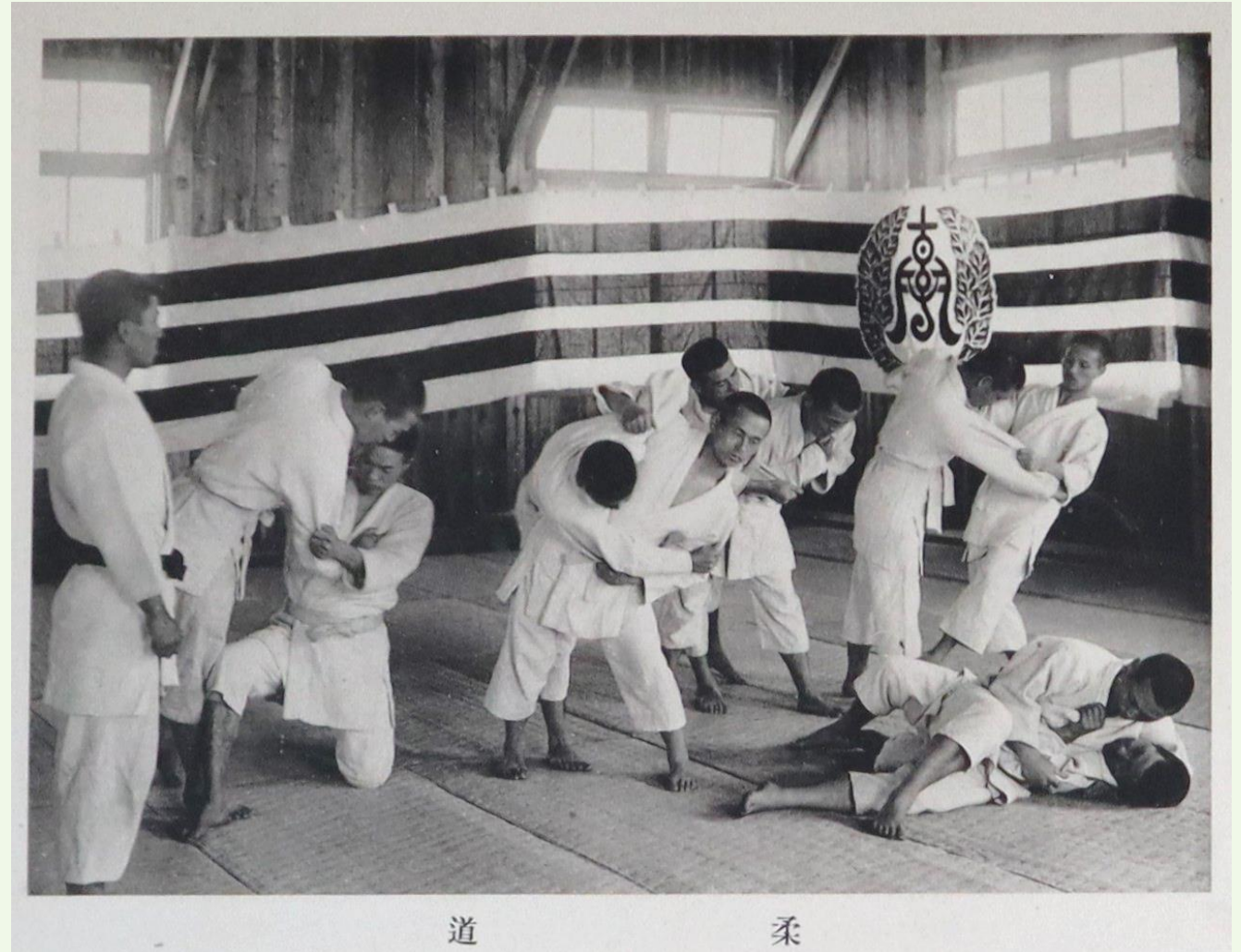
参考資料 上田蚕糸専門学校校章

アルバム「記念」

上田蚕糸専門学校 第三期卒業 より

1916(大正5)年3月

上田蚕糸専門学校卒業生資料
大学史資料センター 蔵



武道場には上田蚕糸専門学校の校章をあしらった横断幕がめぐらされていた。

参考資料 長野県師範学校校章の由来



長野県師範学校徽章
『信州大学教育学部附属長野中学校五十年史』より

製作年：1914（大正3）年4月

製作者：不明

デザイン：トガクシショウマの花の中央に師範の「師」の字を配置している。

1902（明治35）年5月23日、皇太子殿下（大正天皇）が行啓の際、講堂に陳列した師範生徒と小学校児童の成績品をご覧になりました。このときに同じく陳列した浅井冽教諭の書「奉迎の歌」「信濃国歌」と戸隠升麻について質問があり、これを宮中に献上し金一封（金百円）を与えられたことを記念し、トガクシショウマの花を図案化した記念章を作りました。その後、1914（大正3）年4月この図案を本校の徽章・校章としました。1951（昭和26）年師範学校廃止まで使用され、1947（昭和22）年新学制による附属中学校の徽章に使用されています。

（信州大学教育学部九十年史編集委員会、『信州大学教育学部九十年史』、1965, p.121）

なお、教育学部附属中学校では、数年前まで構内で生徒たちがトガクシショウマを育てるなどして、師範学校の伝統を受け継いでいます。



（参考）信州大学教育学部附属長野中学校の校章
（『信州大学教育学部附属長野中学校五十年史』）

大学史資料センターWebサイトでも紹介しています。

<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/cat18073/post-118.html>



挿図（着色石版図）：
『信濃博物学雑誌』第24号、矢澤米三郎 画

トガクシショウマ

1884（明治17）年に長野県戸隠で新種植物として発見され、日本人がはじめて日本の植物につけた学名として有名。

～トガクシショウマ献上までのエピソード～

宮中に献上したトガクシショウマは、師範生徒の田中貢一が教師の矢澤米三郎とともに戸隠の大洞沢で採取してきたものです。皇太子殿下が行啓されることを聞き、田中はぜひともこの花をご覧いただくためまだ雪の解け切らない戸隠へ探しに行きます。このとき矢澤も同行しますが、この日（5月11日）は、朝からの雨が雪に変わり大洞沢の入口に着いた時には、15cmほど積もっていました。

あたりは、腕の太さほどの根曲竹やイタドリが何重にも枯れ朽ちていて、1mにおよぶシダ類が一面に敷き詰められ、自然の力強さに畏敬の念を抱くほどでした。なんとか見つけようと雪を踏み進んで探しますが、樹木を倒し大きな石を飛ばすほどの雪崩の跡がいたところにあり恐ろしい様子でした。数時間探し回りましたが一つも見つけることが出来ず、諦めて帰ろうとしたとき、近くの腐敗した落ち葉を手で掻き起こすと、小さなトガクシショウマの幼芽を見つけたのです。これには耐え切れず小躍りしました。そして、土と一緒に持ち帰り、博物教室内で栽培しました。一週間もすると見事に開花したのですが、三日もすると散ってしまうほど短命でした。

皇太子殿下を迎えた23日には、幸いにも1輪の花が咲き残っていたので、これをご覧いただきました。原龍豊校長がトガクシショウマの性質などを説明すると、殿下は熱心にご覧になりご機嫌よくとても満足されていました。こうして、殿下のご意向によりトガクシショウマを献上することになったのです。宮中へ納めたトガクシショウマは、田中と矢澤が31日に再び戸隠へ行き、採取してきたものです。

（出典：田中貢一、『信濃の花』、朝陽館蔵版、1903, p.26-34.）

信州大学 大学史資料センターについて

大学史資料センターでは、信州大学の歴史を将来に伝えていくために本学に関する様々な資料を収集しています。皆様がお持ちの資料をぜひご提供ください。

●資料提供の手続きにつきましては、[大学史資料センターのWebサイト「資料提供のお願い」](#)をご覧ください。

ご提供
いただいた
資料の一部



大学祭パンフレット



講義ノート



記念品



スナップ写真



募集要項・受験票



バックル・徽章



卒業証書



課題レポート



演劇ポスター



アルバム



学生新聞

2026年4月末時点で約10000点の資料をご寄贈いただきました。
ご提供いただきました方々に、厚く御礼を申し上げます。

企画展関連 開催イベント

ギャラリートーク

場所：中央図書館1階展示コーナー

「附属図書館」 12月15日(月) 12:20～12:50

解説：中央図書館 副館長(事務担当) 小島浩子

「自然科学館」 12月16日(火) 12:20～12:50

解説：自然科学館館長 山田 桂

「大学史資料センター」 12月17日(水) 12:20～12:50

解説：大学史資料センター 福島正樹

「食と緑の科学資料館「ゆりの木」」 12月18日(木) 12:20～12:50

解説：農学部 荒瀬輝夫(中央図書館周辺の植栽について巡見を開催)

「教育学部附属志賀自然教育研究施設」 12月18日(木) 12:20～12:50

解説：教育学部 水谷瑞希(ビデオ放映)

信州大学総合博物館創設準備企画展

「信州大学のお宝公開」

信州大学

総合博物館創設準備会

2026年3月、信州大学総合博物館が設立されました。

スライド 制作・編集 信州大学附属図書館・大学史資料センター

資料についての詳しい情報は、各施設・学部へお問い合わせください。